

仙台市文化財調査報告書第54集

神明社窯跡

—発掘調査報告—

1983

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第54集

神明社 窯跡

—発掘調査報告—

1983

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市は県内でも、最も埋蔵文化財の豊富な地域の一つであります。とりわけ、これまでの調査から、人類の起源を知る証しとなった山田上ノ台遺跡や多賀城以前の国家的官衙の存在が明らかになった郡山遺跡などは、こと仙台にとどまることなく、全国的視点に立った歴史の解明に、多くの貴重な資料が得られたことは、誠に意義深いことと考えます。

今回実施された神明社窯跡の発掘調査は、宅地造成の計画に伴うもので、開発申請者との慎重な協議を行い、記録保存を前提とした、事前調査として行なわれたものであります。

本遺跡は、台の原、小田原丘陵のほぼ中ほどにあって、この丘陵一帯は古くから古瓦が散布し、古代陸奥国の官窯跡群があるところとして認知されており、古代東北の歴史解明上重要、かつ東北最大の窯跡群として著名なところとなっています。

このたびの調査からは、窯跡の発見はなかったものの、工房の跡や数多い刻印瓦の検証があり、古代における造瓦所としての性格究明に大きな成果を得ることができました。

ここにその成果内容の公開にあたり、多くの方々の御協力や御助力に対し、深く感謝を申し上げます。さらに、この報告書が、十分活用され、市民文化の創造に多少なりとも資することを念じて序といたします。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本報告書は仙台市折江に所在する神明社窯跡発掘調査報告書である。

2. 本報告書の作成は次の通り分担した。

本文執筆　木村浩二……Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ

青沼一民……V、Ⅶ

遺構トレス……斎藤誠司・安喰真由美

遺物実測………結城慎一・佐藤清江・青沼一民・成瀬茂・安喰真由美・高橋りえ・菊地宣之・遠山克喜・神成浩志・三浦秀樹・桜田逸子・茂泉満

遺物トレス………結城慎一・成瀬茂・安喰真由美・桜田逸子・小林充

遺物復元………赤井沢進・赤井沢千代子・石川勝子

遺物拓影………石川勝子・高橋りえ・菊地宣之・佐藤清江・菅野政彦・遠山克喜

遺物写真………木村浩二・斎藤誠司

遺構写真………木村浩二・青沼一民・工藤哲司・金森安孝

図面整理………斎藤誠司・小林充

編集は木村・青沼が行い、結城がこれを補佐した。

3. 本報告書の実測図・文中の方位は磁北で統一した。

4. 平面位置を表示する相対座標は任意に設置した原点を基準としており、高さは標高値で記した。

5. 本報告書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・佐原：1970）を使用した。

6. 本調査においては、遺構略号を次の通りとした。

S A 柱　　列　　S E 井 戸 跡

S B 建 物 跡　　S I 竪穴造構・竪穴住居跡

S D 溝　　跡　　S K 土　　壙

7. 遺物の分類は次の通りとした。

C 土師器（ロクロ不使用）　　H その他の瓦

D 土師器（ロクロ使用）　　I 陶 器

E 須恵器　　J 磁 器

F 丸 瓦　　K 石器・石製品

G 平 瓦　　N 金属製品

P 土製品

目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の方法と経過	4
IV 発 見 遺 構	5
V 出 土 遺 物	22
VI ま と め	39

図 版 目 次

図版1. 遺跡全景(南より)	43
図版2. 調査地区全景	43
図版3. 調査区全景	43
図版4. I区西半部全景	44
図版5. I区東半部全景	44
図版6. II区全景	44
図版7. S I 1 住居跡全景	45
図版8. S I 2 住居跡遺物出土状況	45
図版9. S I 2 住居跡全景	45
図版10. S I 3 住居跡全景	46
図版11. S I 3 住居跡カマド煙道	46
図版12. S I 4 住居跡遺物出土状況	47
図版13. S I 5 住居跡全景	47
図版14. S I 5 住居跡カマド検出状況	47
図版15. S D 12溝跡	48
図版16. S I 5 住居跡カマド下層	48
図版17. S K 6 土壌遺物出土状況	49
図版18. S K 7 土壌遺物出土状況	49

図版19. S K14土壤東西セクション	49
図版20. S K15土壤遺物出土状況	50
図版21. S D 3溝跡遺物出土状況	50
図版22. ピットNo.59柱穴セクション	51
図版23. ピットNo.59柱根検出状況	51
図版24. ピットNo.127・128柱穴セクション	51
図版25. S K30焼土遺構	52
図版26. S K30焼土遺構	52
図版27. S K31焼土遺構	52
図版28. 出土遺物 平瓦	53
図版29. 出土遺物 平瓦	54
図版30. 出土遺物 平瓦	55
図版31. 出土遺物 平瓦	56
図版32. 出土遺物 平瓦	57
図版33. 出土遺物 平瓦	58
図版34. 出土遺物 丸瓦	59
図版35. 出土遺物 丸瓦	60
図版36. 出土遺物 軒瓦、刻印瓦	61
図版37. 出土遺物 鬼板、土師器、須恵器	62
図版38. 出土遺物 磁器、石製品、土製品、鉄製品	63

I はじめに

1. 調査に至る経過

昭和53年9月19日付をもって、仙台市橋江4-1 木皿栄子氏より、同市橋江6-1外にかかる地区 1948.71 m² の宅地造成の為の開発にかかる発掘届が提出され、仙台市教育委員会社会教育課と協議の結果、この地区が神明社窯跡（仙台市文化財登録番号C-408）内に位置していることから、発掘調査を実施することとなった。この地区は台原・小田原丘陵の東側に位置し、5世紀末から奈良・平安時代を中心長い間、瓦・土器等の窯業生産の盛んな所で、本遺跡の西に隣接した蟹沢中窯跡・橋江遺跡などが発掘調査され、奈良・平安期の窯跡や造瓦所などの実態が解明されつつある。これらの経過や、古窯跡研究会、仙台育英学園高等学校郷土史研究部、仙台市教育委員会文化財担当職員の現地踏査により、宅地造成対象地内に遺構の存在することが予想されたことから、協議の結果、開発部分の事前調査を実施することとし、昭和55年4月14日より本調査を実施した。

2. 調査体制

発掘調査は次のような体制を組んで実施した。

遺跡名称 神明社窯跡（仙台市文化財登録番号C-408）

所在地 仙台市橋江6-1外

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員 木村浩二、青沼一民、工藤哲司、金森安孝

調査期間 昭和55年4月14日～7月21日

調査参加者 森剛男、真山尚幸、春野俊夫、柏 実、佐藤正弘、白井一夫、佐々木祐一、及川和子、鈴木洋子、佐々木澄江、佐藤邑衣、小角菊子、兼子キヨ子、木皿節子

調査協力 地権者 木皿栄子

尚、遺物整理・報告書刊行については木村・青沼がこれにあたり、同係職員結城慎一がこれを補佐し、次の方々の協力を得た。

整理参加者 佐藤清江、安喰真由美、高橋りえ、桜田逸子、石川勝子、赤井沢千代子、赤井沢進、三浦秀樹、茂泉 満、管野政彦、斎藤誠司、遠山克喜、菊地宣之、小林光、神成浩志

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

神明社窯跡は仙台市折江6-1外に所在する遺跡で、仙台市の中心から3.5km程北にあり、東西に長く伸び、仙台市街の北側を画する丘陵の南側斜面に位置している。

この丘陵は東北地方の背梁をなす奥羽山地より太平洋側に伸びた七北田丘陵が、北側を七北田川、南側を広瀬川によって浸食された丘陵の東端部で、台の原・小田原丘陵と呼称されている。特に南側は河岸段丘の発達が著しく、遺跡の立地地区は広瀬川によって形成された4つの段丘（台の原段丘、上町ヶ、中町ヶ、下町ヶ）の中で最も高位にある海拔50~100mの台の原段丘である。この段丘の一部は基岩が露出している岩石段丘であるが、大部分は厚さ5~6mの砂礫層で被われている。

本窯跡の立地する小田原地区は、仙台市街の中心部に近接していることから、近年宅地化が著しく、地形の様相が大きく変化している。現在残っている沼と小路より旧来の水系を推定すれば、本窯跡の西側に位置する与兵衛沼より南流し、藤川に合流し、さらに梅田川に合流する水系が考えられ、この水系の北側にはいくつかの窯跡が連続して立地している。

今回の調査地区はこの水系の北側に位置する丘陵上で、窯が造られたとみられる斜面上部の平場となっている部分で、南側につれて低くなっているが、窯の造られたとみられる斜面は住宅建築の際に大きく削りとられている。

2. 歴史的環境

本窯跡の立地する台の原・小田原丘陵は古代の生産遺跡が集中している地区で、5世紀代の須恵器を出土した大蓮寺窯跡をはじめ、安養寺下窯跡、安養寺中圓窯跡、蟹沢中窯跡、折江窯跡、与兵衛沼窯跡、庚申前窯跡、五本松窯跡等の瓦窯・須恵器窯が点在している。現在も丘陵の西端、堀町には堤焼の窯があり、古くから今日まで、窯業に適した地であったことが知られる。

また、この丘陵は生産遺跡だけでなく、他種の遺跡も多く、本遺跡の北東には、約20基が調査され、総数50基程と推定される善應寺横穴群があり、出土する遺物から7世紀から8世紀代に造営されたと考えられ、窯跡群との関連も考えることもできる。大蓮寺窯跡の中には埴輪をもつ小前方後円墳が存在する。さらにこの丘陵から7km以内をみれば、北東方に陸奥国府多賀城跡、多賀城廃寺、南方に陸奥国分寺跡・同尼寺跡があり、奈良時代から平安時代を通じ、これらの官衙・官寺に瓦を供給する一大窯業地帯として発達していたことが伺える。



- | | |
|---------------------|------------------|
| C - 408 A・B・C 神明社窯跡 | C - 411 安養寺配水場窯跡 |
| C - 171 二ノ森遺跡 | C - 412 安養寺下瓦窯跡 |
| C - 172 神明社裏遺跡 | C - 414 小田原前田窯跡 |
| C - 407 与兵衛沼窯跡 | C - 433 桥江遺跡 |
| C - 409 二ノ森窯跡 | C - 436 安養寺下圓瓦窯跡 |
| C - 410 安養寺中圓瓦窯跡 | C - 437 安養寺圓瓦窯跡 |

神明社第1図

III 調査の方法と経過

1. 調査方法

調査対象地区は旧耕作地と畠地とに分かれており、西側の旧耕作地をⅠ区、東側畠地をⅡ区と呼称し、Ⅰ区の丘陵頂部平場を中心に、東西30m・幅3m、南北39m・幅3mのトレンチを設定し、遺構の範囲確認作業を行ったところ、平場は表土直下の深さ5~10cmで地山面を検出したが、南側斜面部分は2層暗褐色シルトがあり、3層目で黄褐色シルト質粘土の地山面を検出した。最も深い部分で、地表下40cm程である。斜面部分では遺物の散布量も多く、遺構の分布密度も高いと判断し、南トレンチの南端から西に幅3m、長さ15mの第5トレンチ、西に幅3m、長15cmの第6トレンチを設定し、遺構検出作業を行った。その結果、北側平場には多数の柱穴とみられるピット、南側斜面には土壤、竪穴遺構等が確認された為、調査区を全面に広げ重機で表土排除作業を行った。また、Ⅱ区についても同様、重機で耕作土を排除し、地山上面で遺構検出作業を行った。

実測図の作製にあたっては、標高46.00mのNo.1基準杭を設定し、平面図は調査区内に任意に設定した原点1を基準にN-30°Eの基準方向で、遺り力基準杭をほぼ3m毎に設置して、図化作業を行ったが、本報文の中では全てN-0°の磁北基準方向に訂正した。

2. 調査経過

調査は4月14日から開始され、23日から重機によって全面調査が行なわれ、遺構精査はⅡ区から始められた。Ⅱ区では約200の小柱穴・ピットと溝跡1条、焼上遺構2基を検出し、7棟以上の掘立柱建物跡があることがわかった。5月下旬までにⅡ区の精査、実測図作成作業をほぼ終了したが、重複遺構の精査・図面追加作業の為、6月下旬まで作業を続行した。5月下旬からはⅠ区の遺構精査に主力をおき、北側平場から作業を進めた。Ⅱ区よりやや高い平場にはⅡ区から続く小柱穴・ピット群が検出され、掘立柱建物跡3棟以上、柱列、竪穴住居跡1棟、竪穴遺構1基の他、瓦溜めとみられる土壤1基、井戸跡1基、土壤等が検出された。また、Ⅰ区南側の斜面部分には工房跡とも考えられる3軒の竪穴住居跡が重複して検出された他、溝跡や、粘土溜めと考えられる土壤等が検出された。6月下旬までにⅠ区南側の3号・4号竪穴住居跡を残し、調査をほぼ終了し、6月19日には調査の概要が一応まとまったことから、報道発表を行い、21日には現地説明会を行って一般に公開した。6月下旬からは梅雨に入り、降雨の為、作業は非常に遅れたが、7月21日、全ての作業を終え、発掘調査を終了した。実働56日で全調査面積は1,200m²であった。

IV 発見遺構

発見された遺構は竪穴住居跡・竪穴遺構6軒、掘立柱建物跡11棟、柱列3列、瓦溜め遺構1基、井戸跡1基、焼土遺構2基、土壤30基、溝跡12条、柱穴・ビット約400である。遺構は主にI区北半部の平場、南端部の斜面、II区中央部の3地区にまとまって発見された。ここではI・II区を通して各遺構毎に概略を記述してゆきたい。

1. 竪穴住居跡・竪穴遺構

S I 1住居跡 上部の削平が著しいため、貼床の一部と周溝が検出されたのみである。東西長3.9m、南北長4.0mのや、隅丸の方形を呈し、北壁中央にカマドがつけられていたものとみられる。南北主軸方向はN-8°-Eである。周溝は幅20cm、深さ10cmで、南壁側中央から斜面下方の南側に向かって、長さ2m程の排水溝とみられる溝が周溝に接続している。北壁際周溝のカマド両脇には周溝上面に平瓦片が出土した。主柱穴はみられない。

S I 2竪穴遺構 東西長2.5m、南北長2.5mのほぼ正方形で、深さ22~27cm。壁は斜めに立ちあがっており、底面は平坦である。南北軸方向はN-14°-Eである。堆積土は褐色シルト・にぶい黄褐色粘土質シルトなどで、底面上には多量の炭化粒・木炭・焼土塊が堆積しており、北側には特に焼土がブロック状ないし、層を成している。F-33・38「田」刻印文字丸瓦(第15図14・9)の他、平瓦・丸瓦・土師器・須恵器片が出土している。S B 7掘立柱建物跡を切っている。

S I 3住居跡 東西長5m、南北長5.1mのや、歪んだ隅丸方形で、斜面に造られていることから北側では深さ40cm程度で、壁はややゆるやかに立ちあがるが、南側では深さ5cm程度で、壁の立ちあがりも明確でない。カマドは北壁中央につけられているが、住居廃絶後にとりこわされており、長さ1.7m、幅30cm、深さ25cm程の煙道がみられる。南北主軸方向はN-7°-Eである。床面は貼床で、住居中央部に60×80cm程の範囲で焼面がみられ、周辺に炭化物が広がっている。主柱穴は4つあり、直径30~50cmの不整円形の掘り方に、直径10~20cmの柱痕跡がみられる。各々、壁から1~1.2m離れ、柱間寸法は2.7m~2.8mである。平瓦・丸瓦の他、土師器甕・須恵器壊・甕が出土している。また、住居廃絶後、竪穴遺構として使用されたものとみられるが、堆積土内から瓦類が多量に出土した。S I 4・5、SD 8・12を切っている。

S I 4住居跡 S I 3・5住居跡の東側に貼床の一部と焼土面が検出されたが、東端部には平瓦・丸瓦・土師器・須恵器片が集中してみられたものの、住居の形状・規模等の詳細は不明である。S I 3・5を切っている。

S I 5A・B住居跡 東西長6.4m、南北長6.2mの方形で、深さはS I 3とほぼ同様である。北壁と東壁はS I 3と同位置であり、床面も殆んど同じ面を使用している。東壁南寄りの

位置にカマドがつけられていたものとみられる。南北主軸方向は N - 7 - E である。幅25cm、深さ10cm程の周溝が廻っており、東壁際周溝の上には、蓋をする様に丸瓦を被せている。施設丸瓦は12個体出土した。床面は全域で検出されなかったが、S I 3 の西外側で重複しなかった部分では貼床が認められた。主柱穴は4つあり、直径40~60cmの不整円形の掘り方で、柱痕跡は直径15cm程である。柱穴位置は壁から1.2~1.5m離れ、柱間寸法は3.6~3.8mである。平瓦・丸瓦片の他、床面上から須恵器E - 7 蓋（第19図1）、「田」刻印文字平瓦G - 38（第15図18）、周溝から丸瓦F - 10~19・21・22（第13図1~9、第14図2）などがある。

この住居は殆んど同位置・同規模での建て替えが行なわれており、建て替え前のものをS I 5 B、建て替え後をS I 5 Aとしたが、Bは西側がAより内側に周溝が検出され、コーナー部分が丸味をもった限丸方形を呈している。主柱穴は4つ検出され、Aよりや・内側に位置しており、直径40~50cmの不整円形の掘り方で、柱痕跡は直径10~15cmである。柱間寸法は3.1~3.2mである。

S I 6 穴空遺構 西辺と北西コーナーの一帯を検出したのみで詳細は不明であるが、西辺長は7m以上でさらに南にのび、深さは斜面に造られているため、底面も南に傾斜しており、深さは15~20cm程で、壁は直立気味に立ちあがっている。周溝・貼床等は検出されなかった。

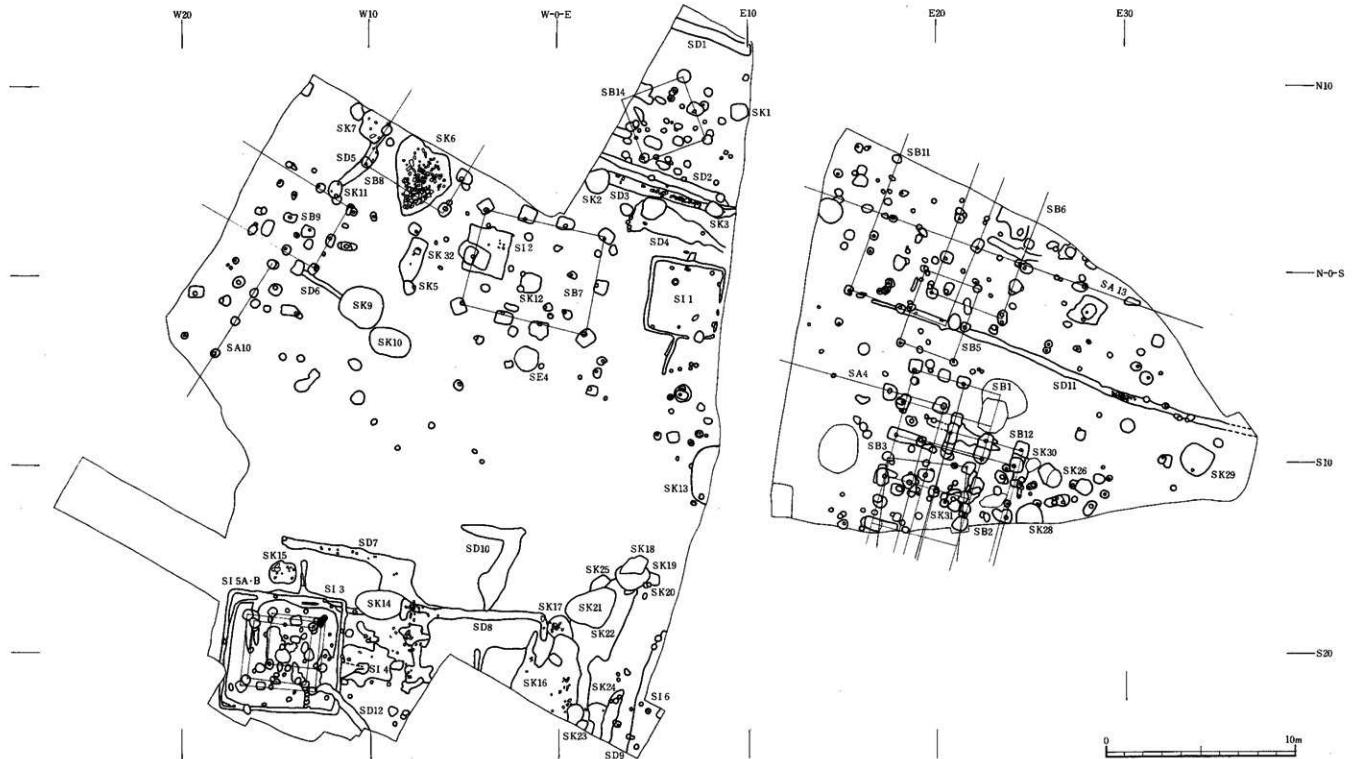
2. 掘立柱建物跡・柱列

S B 1 建物跡 柱行4間以上、総長8.2m以上（柱間寸法1.8~2.5mと不揃い）、梁行2間、総長4.5m（柱間寸法2.6+1.9mと不揃い）の南北棟縦柱建物跡である。建物方向はN - 16°- Eである。柱穴は一辺50~90cmの不整形・長方形で、柱痕跡は直径20cm前後であるが北西隅柱は柱根が遺存していた。S B 2・3・12に切られている。

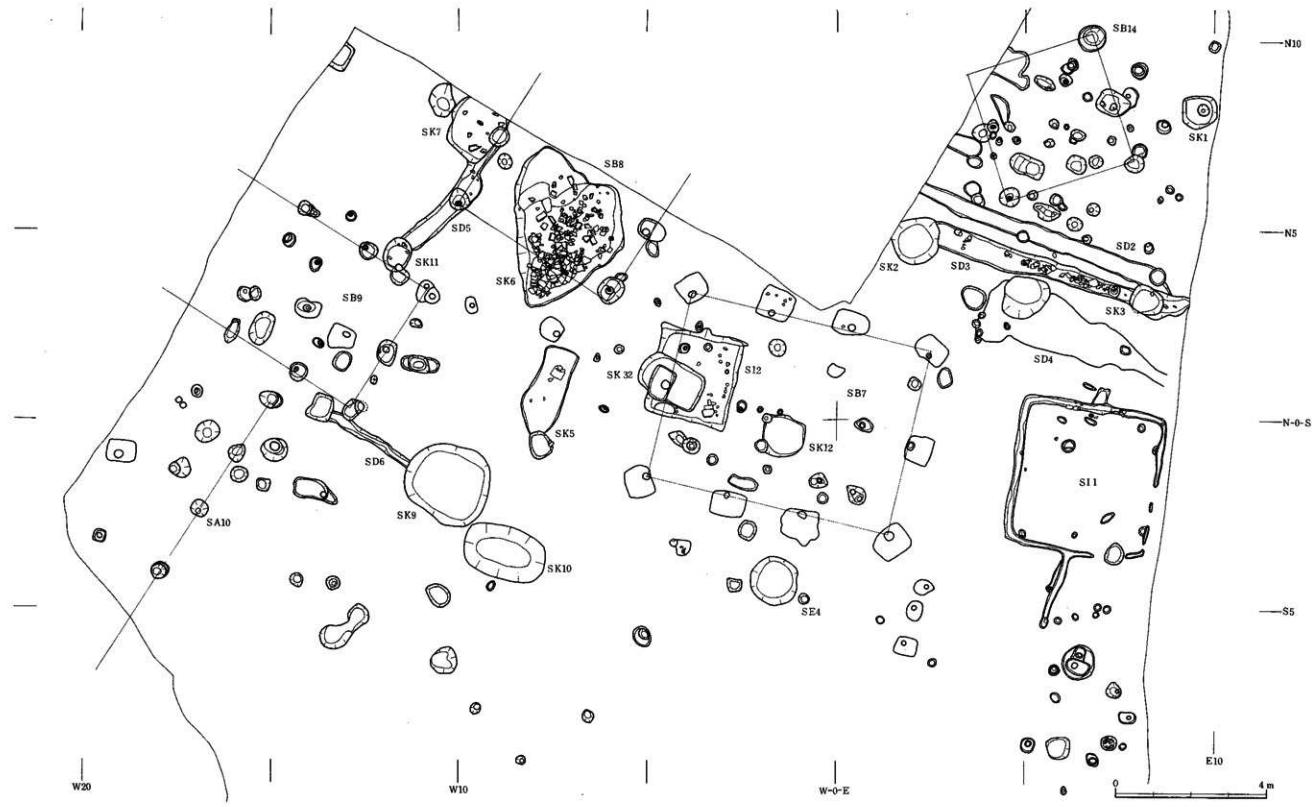
S B 2 建物跡 柱行3間以上、総長4.1m以上（柱間寸法1.9~2.2mと不揃い）、梁行3間、総長5m（柱間寸法1.4~1.9mと不揃い）の南北棟建物跡とみられるが、南側部分が調査区外で不明である。建物方向はN - 15°- Eである。柱穴は一辺35~80cmの不整形・不整円形で、深さ60cm程である。柱痕跡は直径20~24cmであるが、北東隅柱は柱根が遺存していた。S B 1を切っており、S B 12に切られている。

S B 3 建物跡 東西2間、総長4m（柱間寸法2m等間）、南北2間以上、総長4m以上（柱間寸法2.1m）の建物跡で、建物の南側部分は調査区外で不明である。東西柱列方向はE - 7°- Sである。柱穴は直径30~60cm程の不整形で、深さ50cm程である。柱痕跡は直径12~20cmである。

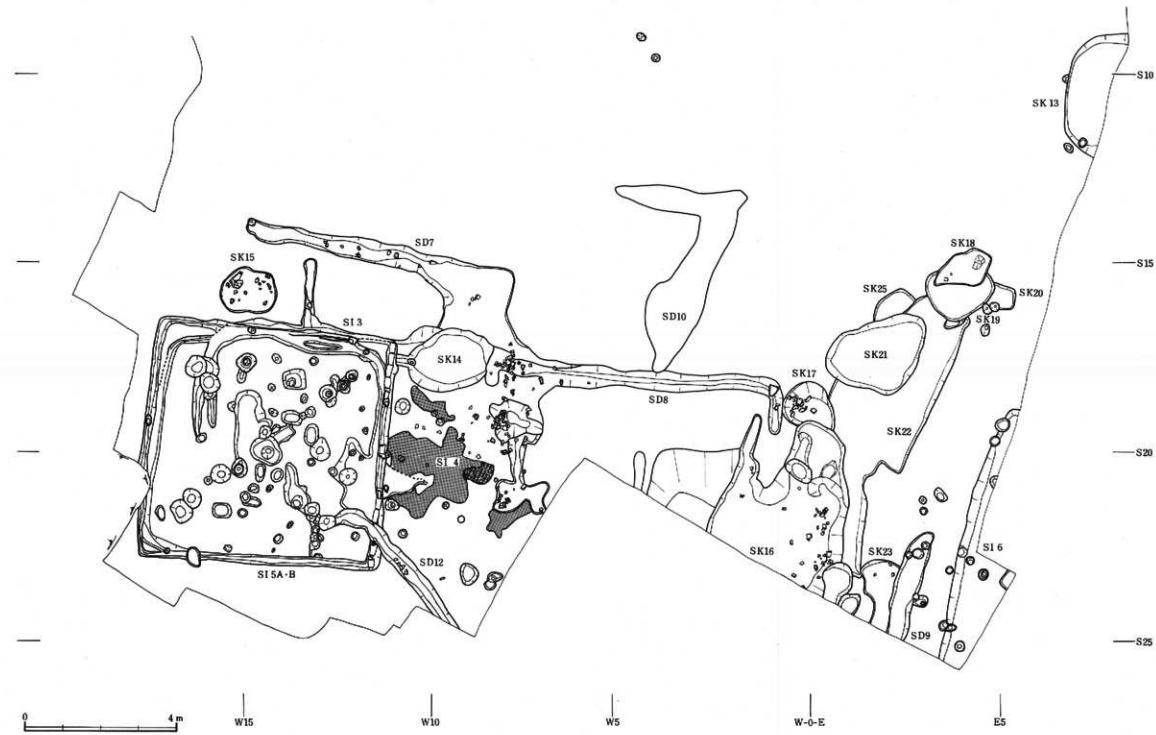
S A 4 柱列 東西3間以上、総長8.2m以上（柱間寸法3m）で西方向へ延び、南北2間以上、総長6.7m以上（柱間寸法3.7m）で南方向に延びる柱列である。北東部が直角に屈曲しており、東西柱列方向はE - 16°- Sである。柱穴は一辺60~80cmの不整形で、深さ30~40cm



第2図 調査区全体平面図



第3図 I区北半部平面図



第4図 I区南半部平面図

ており、東西柱列方向はE - 16° Sである。柱穴は一辺60~80cmの不整方形で、深さ30~40cm柱痕跡は直径23~30cm、深さ45~55cmである。

S B 5 建物跡 桁行2間、総長4m（柱間寸法2.1 + 1.9m）、梁行1間、総長2.9mの南北棟建物跡である。建物方向はN - 18° Eである。柱穴は直径40cm前後の不整円形で、深さ10~40cm、柱痕跡は直径13~20cmで、深さ50~60cm程度である。S D 11を切っている。

S B 6 建物跡 桁行2間以上、総長5.8m以上（柱間寸法2.1m等間）、梁行2間、総長3.9m（柱間寸法1.9~2m）の南北棟建物跡であるが、北側部分は調査区外で詳細は不明である。建物方向はN - 20° Eである。

S B 7 建物跡 桁行3間、総長6.5m（柱間寸法2.1~2.3m）、梁行2間、総長4.9m（柱間寸法2.4~2.5m）の東西棟建物跡である。建物方向はE - 13° Sである。柱穴は一辺70~100cmの方形・長方形で、深さ40~50cm、柱痕跡は直径20cm程度である。桁の柱穴は桁方向に長い長方形で、四隅の柱穴は対角方向を向いている。柱位置は掘り方内で建物内側壁に接している。S I 2、S K 32に切られている。

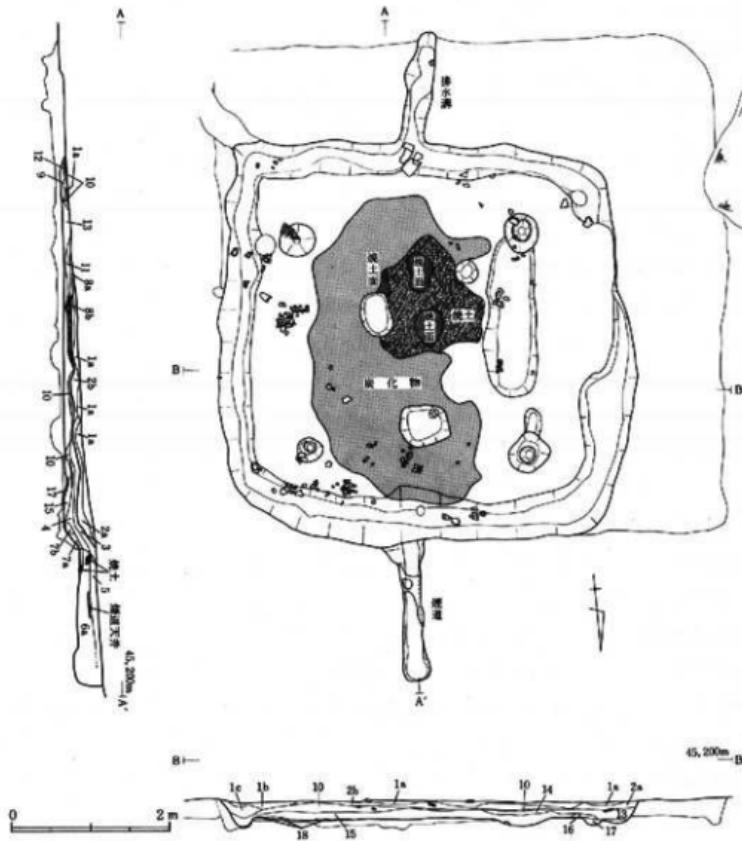
S B 8 建物跡 東西1間（2間？）、総長4.5m、南北2間以上、総長2.6m（柱間寸法1.8~2.1m）の建物跡であるが、北側部分は調査区外で詳細は不明である。建物方向はE - 31° Sである。柱穴は直径50cm程度の不整円形、一辺60~80cmの隅九方形で、深さ40~50cm、柱痕跡は直径15cm前後、深さ50~60cmで、南側2柱穴には柱痕跡底面に、扁平な石の礎板が検出された。S D 5に切られている。

S B 9 建物跡 東西2間以上、総長5.3m以上（柱間寸法1.9m）、南北2間、総長3.7m（柱間寸法1.8~2m）の東西棟と考えられる建物跡であるが、西側部分は調査区外で詳細は不明である。建物方向はE - 30° Sである。柱穴は50×60cm程度の不整方形ないし直径50cm程度の円形で、柱痕跡は直径15cm前後である。

S A10柱列 南北方向4間以上、総長6.3m以上（柱間寸法1.7~1.9mと不揃い）の柱列で柱列方向はN - 33° Eである。柱穴は直径40~50cmの円形・不整円形で、深さ40~45cmであるが、柱痕跡は不明である。

S B11建物跡 桁行3間以上、総長7.4m以上（柱間寸法3~3.1m）、梁行2間、総長5.1m（柱間寸法2.4~2.7m）の南北棟建物跡であるが、北側が調査区外で詳細は不明である。建物方向はN - 20° Eである。柱穴は直径40~50cmの不整円形で、深さ20~50cmである。柱痕跡は直径15~20cmである。S D 11を切っている。

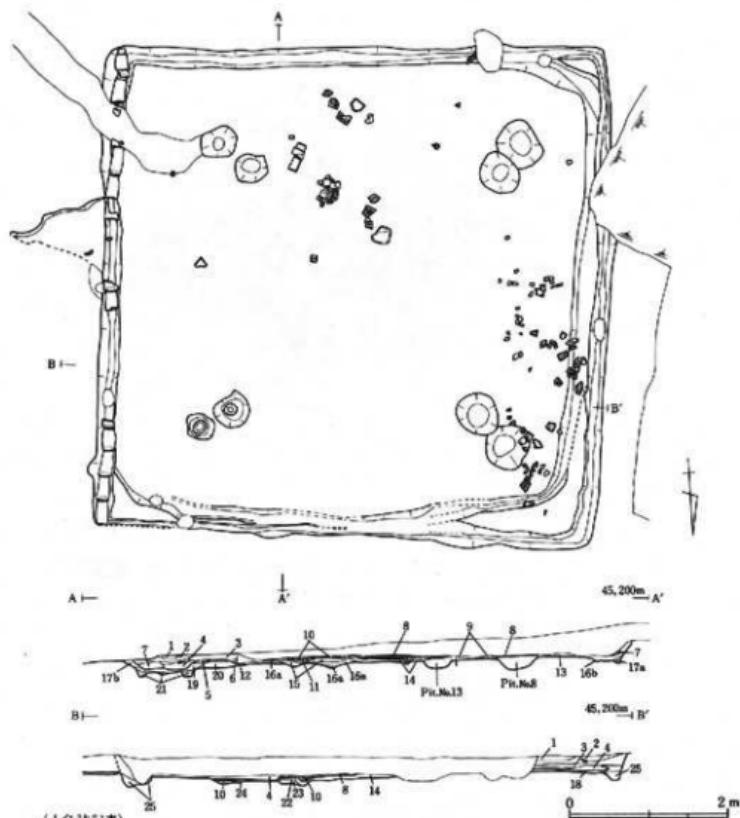
S B12建物跡 桁行2間以上、総長5.1m以上（柱間寸法3~3.5mと不揃い）、梁行2間、総長3.8m（柱間寸法1.9m）の南北棟建物跡とみられるが、南側が調査区外で詳細は不明である。建物方向はN - 13° Eである。柱穴は一辺70~100cmの不整方形・不整長方形ないし是一辺50cm程度の不整方形で、柱痕跡は直径15~20cmである。S B 1・2を切っている。



(土色註記表)

層番	土 色	土 性	層番	土 色	土 性
1 a	10YR 5% 褐 色	粘土質シルト	8 b	2.5Y 5% 暗赤褐色	シルト質粘土
1 b	10YR 5% 褐 色	粘土質シルト	9	10YR 5% 褐 色	シルト
1 c	10YR 5% 褐 色	粘土質シルト	10	10YR 5% 褐 色	砂質シルト
2 a	10YR 5% にぼい黄褐色	粘 土	11	5YR 5% 暗赤褐色	粘 土
2 b	2.5Y 5% にぼい黄褐色	粘 土	12	10YR 5% にぼい黄褐色	シルト質粘土
3	10YR 5% にぼい黄褐色	粘土質シルト	13	10YR 5% 明黄褐色	シルト
4	10YR 5% 暗褐色	シルト質粘土	14	10YR 5% 明黄褐色	シルト質粘土
5	10YR 5% 褐 色	粘土質シルト	15	10YR 5% にぼい黄褐色	粘 土
6 a	10YR 5% 褐 色	粘土質シルト	16	10YR 5% 明黄褐色	シルト質粘土
7 a	7.5YR 5% 褐 色	シルト質粘土	17	10YR 5% 褐 色	粘土質シルト
7 b	7.5YR 5% 褐 色	シルト質粘土	18	10YR 5% 黄 褐 色	砂質粘土
8 a	10YR 5% にぼい黄褐色	シルト質粘土			

第5図 SI 3堅穴住居跡



(土色註記表)

層No	土 色	土 性	層No	土 色	土 性
1	10YR 5% 黄褐色	シルト質粘土	15	10YR 5% にぼい黄褐色	粘 土
2	10YR 5% 黄褐色	シルト質粘土	16a	10YR 5% 黄褐色	粘 土
3	10YR 5% 黄褐色	粘土質シルト	16b	10YR 5% 黄褐色	シルト質細礫
4	2.5Y 5% にぼい黄褐色	粘 土	17a	10YR 5% 黄褐色	粘土質シルト
5	10YR 5% 灰褐色	粘土質シルト	17b	10YR 5% にぼい黄褐色	シルト質粘土
6	2.5Y 5% 黄褐色	粘 土	18	10YR 5% 灰褐色	粘土質シルト
7	10YR 5% にぼい黄褐色	シルト質粘土	19	10YR 5% 灰褐色	粘土質シルト
8	5YR 5% 暗赤褐色	粘 土	20	10YR 5% 灰褐色	粘土質シルト
9	10YR 5% にぼい黄褐色	粘 土	21	10YR 5% 灰褐色	粘土質シルト
10	5YR 5% 暗赤褐色	シルト	22	10YR 5% にぼい黄褐色	粘土質シルト
11	10YR 5% 黑褐色	シルト質粘土	23	10YR 5% 黄褐色	粘土質シルト
12	10YR 5% 黄褐色	粘 土	24	2.5Y 5% にぼい黄色	粘 土
13	10YR 5% 明黄褐色	細礫シルト	25	10YR 5% 灰褐色	粘土質シルト
14	10YR 5% 黑褐色	粘土質シルト			

第6図 S I 5A・B堅穴住居跡



第7図 SK 6瓦溜め遺構

S A 13柱列 東西方向5間以上、総長14.5m以上（柱間寸法2.7~3mと不揃い）の柱列で、柱列方向はE-18°-Sである。柱穴は50×80cm程の不整長円形ないしは直径40~50cmの不整円形で、深さ10~50cmである。柱痕跡は直径14~16cmである。

S B 14建物跡 東西1間、南北2間、総長3.4m（柱間寸法1.5~1.9mと不揃い）の方形建物跡で、建物方向はN-16°-Wである。柱穴は直径50~70cmの円形で、深さ20~40cmである。柱痕跡は10~15cmである。

3. 瓦溜め跡

SK 6 瓦溜め跡 南北長4.2m、東西長3.8m、深さ20cm程の土壌で壁はゆるやかに傾斜し底はゆるい起伏があり平坦でない。堆積土は大別して4層にわけられるが、にぶい黄褐色シルト・シルト質粘土が主体を占め、2層から底面まで瓦が集中して入っており、特に土壌内の南側に多い。平瓦・丸瓦は歪んだものが多く、焼成不良品を投棄したものとみられる。G-1～33平瓦（第9～11図）、F-1～8丸瓦（第13・14図）の他、F-30軒丸瓦（第16図1）、G-70平瓦「丸」刻印文字（第15図3）、土師器D-1・2坏（第18図2・3）、須恵器E-1・2坏（第19図9・11）、D-1 フイゴ羽口（第21図8）などが出土している。

4. 井戸跡

SE 4 井戸跡 直径1.2mの円形、底径1m、深さ1.1mの素掘りの井戸跡で、下半部の壁はほぼ直立に立ちあがっている。堆積土は大別すれば5層に分けられる。3層下面で一旦、堆積が停滞し、土壌状の落ち込みを成している。黄褐色砂質粘土が主体を占め、3層はうすくレンズ状に堆積した、にぶい黄褐色シルト質粘土、また底面にもうすく黒褐色シルト質粘土が堆積している。

5. 焼土遺構

SK 30 焼土遺構 長さ1.3m以上、幅70cm、深さ8cm程の長円形ないしは隅丸長方形を呈すとみられるが、SB 2・12建物跡などの柱穴に切られており、詳細は不明である。壁の立ちあがりはわずかであるが、平坦な底面からゆるやかに立ち上がっている。堆積土は褐色・暗褐色粘土質シルトで、焼土・炭の粒・ブロックを含み、底面には2cm程の厚さで炭化物層があり、底面周縁から壁面は赤褐色に焼けしまっている。

SK 31 焼土遺構 70×35cm以上、深さ15cm程の円形を呈すとみられるが、SB 3建物跡などの柱穴に切られており、詳細は不明である。底面の状況は明らかでないが、壁はゆるやかに立ちあがっている。堆積土は明赤褐色・褐色の焼土で、壁面は焼けてしまっている。

6. 土 壤

SK 1 土壌 80×90cmの隅丸方形、深さ20cm、下端は直径65cm程で、底面は平坦である。底面に直径30cm、深さ25cmのビットあり、掘立柱穴ともみられる。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトである。F-40重唇文軒丸瓦（第16図3）、G-72「占」刻印文字平瓦が出土している。

SK 2 土壌 直径1.2～1.3m、深さ80cm、下端は直径80～90cmの円形を呈し、底面は平坦である。SD 3を切っている。

SK 3 土壌 70×90cmの不整円形で、深さ60cm、底面は直径60cm程で、平坦である。瓦片を出土している。SD 3を切っている。

SK 5 土壌 長さ2.5m、幅1m、深さ2～10cmで、南北に長く、浅い土壌である。堆積土

は黄褐色シルトで、G-57平瓦（第11図5）の他、瓦片、須恵器片、フイゴ羽口が出土している。

SK7土壙 1.2×1.5m以上、深さ10~15cmのや、南北に長い土壙で、底面はや、凹凸がある。堆積土は黄褐色シルトが主体を占めている。須恵器E-13塊（第19図4）、F-26・28（第13図11）が出土している。

SK8土壙 1.6×1.3mのや、歪んだ方形で、深さ5cm程である。底面は平坦である。S I 2 竪穴造構の底面で検出し、北壁と西壁が焼けてしまっている。S I 2、S B 7 に切られている。

SK9土壙 2.1×2.3m、深さ30cm程の不整円形で、壁はゆるやかに立ちあがっている。堆積土は褐色・黄褐色シルトで、瓦・土師器・須恵器・磁器片が出土している。S D 6 を切る。

SK10土壙 2.2×1.4m、深さ40cm程の長円形で、壁はゆるやかに立ちあがっている。堆積土は褐色シルトで、瓦・土師器片が出土している。

SK11土壙 70×90cm、深さ15cmの円形で浅い槽鉢状を呈す。堆積土は黄褐色シルトで、底面に焼土・炭化物が堆積、瓦・土師器・須恵器片が出土している。S D 5 を切っている。

SK12土壙 直径1.1m、深さ3~5cmの不整円形、堆積土は褐色粘土質シルトで、瓦片が出土している。

SK13土壙 3.4×1.2m以上、深さ20~30cmであるが、東半部が調査区外で詳細は不明である。堆積土は暗褐色・褐色シルトで、瓦・磁器片が出土している。

SK14土壙 2×2.8mの椭円形で、深さ25cm程、や・起伏のある底面から壁がゆるやかに立ちあがる。堆積土は上層が黒褐色シルトであるが、下層は厚さ15cm以上が明黄褐色（白色）粘土で、原料粘土の粘土溜めとも考えられる。遺物は全て上層からでF-25重圓文軒丸瓦（第16図6）、G-44・45平瓦（第11図1・2）の他、土師器・須恵器片がある。

SK15土壙 1.1×1.5mの不整円形で、深さ5cm程で、底面は平坦で、壁がわずかに立ちあがっている。堆積土は暗褐色粘土質シルトで、瓦・土師器・須恵器片が出土している。

SK16土壙 3.6×4m程の不整形の落ち込みで、南側は調査区外で詳細は不明。斜面に造られているが、斜面下方にしたがって深くなり、25cm程である。堆積土は黒褐色シルトで、瓦片が出土している。SK17・24を切っている。

SK17土壙 1.3×1.5m程の不整椭円形で、斜面に造られており、深さは10~20cmである。土師器壺・須恵器E-14・15・16蓋（第19図3・2）、G-71「物」刻印文字平瓦（第15図21）などが出土している。

SK18・19・20・21・23・25土壙 長さ、幅が1~2.5m程の不整形を呈する土壙で、深さはいづれも10~20cmで、堆積土は褐色・暗褐色のシルト・粘土質シルトである。SK25からは



第8図 II区平面図

F - 27丸瓦（第14図5）、G - 63重弧文軒平瓦（第16図9）、鬼板などが出土している。SK 18はSK 19を切り、SK 19はSK 20・22を切っている。また、SK 21はSK 22・25を切り、SK 25はSK 22に切られている。

SK 22土壤 長さ5m以上、幅2.6mで、斜面に沿って、深10cm程の浅い溝状の落ち込みとなっている。堆積土は褐色・黄褐色シルト・シルト質粘土で、G - 55平瓦（第12図7）、F - 34「田」刻印文字丸瓦（第15図16）など瓦片が出土している。南側斜面下方をSK 16に切れ北側の斜面上方先端部をSK 18-21に切られている。

SK 26土壤 1×1.3mの長円形で、深さ30cmで、西壁はゆるく立ちあがるが、東壁は直立している。堆積土は明褐色シルト、褐色粘土質シルトである。

SK 28土壤 1.4×1m以上で、深さ50cmの擂鉢状を呈するとみられるが、南側が調査区外で詳細は不明。堆積土は黄褐色・黄橙色の粘土である。

SK 29土壤 1.5×1.6m程の不整円形で、深さ20cm、底面は平坦で、0.8×1.2mの長方形を成す。壁はゆるやかに立ちあがっている。

7. 溝 跡

SD 1溝跡 長さ3.8m以上、上幅50~60cm、下幅30~40cmで、東西方向にのびている。瓦・土師器・須恵器片がわずかに出土している。

SD 2溝跡 長さ7.9m以上、上幅30~60cm、下幅20~50cmで、東西方向にのびている。SD 3とほぼ平行している。

SD 3溝跡 長さ7.2m以上、上幅40~60cm、下幅30~50cmで、東西方向にのびている。堆積土は褐色・黄褐色の粘土質シルトである。F - 36「伊」刻印文字丸瓦（第14図6）の他、「矢・田・物・丸」などの刻印文字平瓦（第15図）が多数出土している。SK 2・3に切られる。

SD 7溝跡 東西方向長7.1m、上幅30~40cm、下幅20~30cmであるが、東端が南に屈曲して、上幅が2m程になり、SK 14、SD 8と重複して南端は不明である。土師器壺、G - 51「物」刻印文字平瓦の他、瓦片が多数出土している。SD 14に切られている。

SD 8溝跡 東西方向8m以上、上幅30~60cm、下幅10~20cmで横断面形はほぼV字形であるが、東端部が1~1.5m程南側に直角に屈曲している。瓦片がわずかに出土している。SK 14、SI 3・5に切られている。

SD 11溝跡 長さ20m以上、上幅20~40cm、下幅15~35cm、深さ0~10cmで、方向はE - 20° - Sである。

他にSD 4・5・6・9・10・12溝跡が検出された。

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦、鉄製品、土製品、石製品、陶磁器類等である。その中で瓦類が全出土量の9割を占めており、土師器は極少量である。遺物の総量は、平箱で45箱である。特にSK6瓦溜め遺構から多量の瓦を出土している。

出土した遺物について器種、器形ごとに略述する。

1. 土 師 器

土師器は、ロクロ未使用のもの、ロクロ使用のものとがあり、少量の壺・甕等で、実測可能な遺物は数点のみである。

壺 ロクロ未使用のもの 壺C-1（第18図1）は、平底の底部から直立して立ち上がり、内面はヘラケズリのちナデ調整され、外面はナデが施されている。壺C-2は、体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上がり、内面黒色処理が施されている。

甕 ロクロ未使用のもの 体部片のもので胎土、焼成が悪く、調整等は不明で、固化できたものはない。

ロクロ使用のもの 甕D-1・2（第18図2・3）は、底部片で、底部切り離し回転糸切りのち体部下半からナデ・ヘラケズリが施されている。甕D-3（第18図5）は、頸部でくびれて口縁部で外反する。内外面ロクロ調整されている。甕D-4（第18図7）は、器高より口径が大きく、頸部でくびれ口縁部で外反する。内面ヘラミガキ・黒色処理が施されている。甕D-7（第18図6）は、体部上半破片で、頸部がくびれ、口縁部で外反し、端部は上方に立ち、体部外面ヘラケズリの長胴甕である。

2. 須 恵 器

須恵器は、壺・高台付壺・蓋・甕・壺・把手付塊等で、実測可能なものは少ない。

壺 底部は平底で、底部切り離し技法、及び調整によって分類される。

A類 - 回転糸切り未調整のもの

B類 - 回転ヘラ切り未調整のもの

C類 - 回転ヘラ切りのち回転ヘラケズリ調整のもの

D類 - 回転糸切りのち回転ヘラケズリ調整のもの

E類 - 切り離し技法不明で回転ヘラケズリのもの

I・II区の土壤、SI-3住居跡4層下出土のものが大半である。壺分類のうち特に壺E類（切り離し技法不明で回転ヘラケズリのもの）が主体を占めている。

高台付壺 2点出土し、固化できたのは、1点のみである。E-25（第19図5）は、底部片で底部切り離し技法不明で回転ヘラケズリ、高台は、「八」の字状に貼り付けている。

蓋 E - 7 (第19図1) は、天井部一部欠損しているが、端部は下方に屈曲するものである。E - 14・15 (第19図3・2) は、天井部はほぼ平頂で、いずれも扁平な擬宝珠形ツマミを有するもので、端部は、下方にや、内弯している。

甕 大半が細片のため、器形の判明するものはない。E - 4 (第18図8) は、頸部から口縁部にかけて外反し、内外面クロクロ調整が施されている。E - 6・10は、外面は平行タタキメであり、体部外面・底部ヘラケズリ、内面ナデ調整が施されている。甕内外面の調整を観察すれば、外面は、平行タタキメが多くみられ、太目～細目のものがある。内面は、青海波文がみられ、またナデ・横位のハケメが施されている。E - 9 (第18図9) は、体部下半片のもので、体部外面・底部ヘラケズリ、内面ナデ・ヘラナデが施されている。

壺 E - 17 (第19図12) は長颈壺の頸部片である。頸部からや、外傾しながら口縁部にいたり口縁端部で外側に張り出している。E - 2 (第19図11) は、小形の底部で、底部は回転糸切りである。

把手付壺 E - 13 (第19図4) は、口縁部片で体部上半に幅2.0 cm、長さ1.0 cmの把手を張り付けている。

硯 E - 21・23・24 (第19図14・15) は、いずれも円面硯で、脚中央部から基底部の小破片3点出土し、そのうち図化できたのは、2点のみである。いずれも器厚は薄手のもので、脚中央部に縱位のヘラ書きの平行沈線が描かれ、縱長の孔窓が穿たれている。

その他 破片の為器形は、不明であるが、胎土は須恵質で厚さ1.0 cmの板状を呈し、片面に推定直径1.0 cmの穿孔があり、片面に擦痕が認められることから風字硯と考えられる。(第19図13)

3. 瓦

瓦は、I・II区の各遺構から整理用平箱で40箱程出土している。特にSK6瓦溜め遺構、SI3・5住居跡から出土している。種別は平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、その他刻印文字瓦等である。

(1) 平 瓦

平瓦は、本遺跡出土遺物中、大半を占めている。特にSK6瓦溜め遺構から平箱で15箱程度ある。図化したのは、28点程度である。

凹面は、目の細い布目が多く見られ、布目の荒いものはない。全体的にスリ消しされたものが大半を占めているが、全面にスリ消されているのは少ない。一部あるいは、中央部分に布目が残っており、両側端面にスリ消しされているのが多い。また布目が模骨痕状に残るものがあることから、桶巻作りのものと思われる。さらに糸切り痕が放射状に残るものもある。

凸面は、繩印き目が縱方向のものが大半で、一部斜め方向(第11図4)・(第12図4)のもの

がある。また縄目の大きさは、ほぼ同一の縄目であり、極端に細かったり、太かったりするものはない。全体的にスリ消しされているのは、少いようであるが、一部、全面的に浅く縄目がスリ消されているもの、乾燥時の圧痕が若干見えるのがある。（第12図7）は、さらに、凹面で多く見られた糸切り痕が凸面でも認められる。

全体的に平瓦を観察すれば、ほぼ同様の調整技法で製作されていると思われる。凹面は、糸切り、布目、スリ消し、凸面は、縦方向の縄叩き目のち一部スリ消し等が見られる。形状は、正方形に近く、長さ35cm前後、広端幅28cm前後、狭端幅25cm前後である。中には、G-45（第11図2）の長さ46cmと長方形を呈するものがあるが、全体的には、明瞭なばらつきはなく、形状・調整法からほぼ均一な平瓦であると考えられる。

(2) 丸 瓦

丸瓦は、全て玉縁付の有段丸瓦で、粘土經桶巻作りである。筒部凸面は縄で全面を叩き締めたのちナデ調整されている。玉縁部は、回転を利用してナデ調整を施している。筒部凹面は、布目、一部ナデ調整されている。玉縁部の形態をみると

A類：筒部より玉縁端部にかけて幅がすぼまり、器高が低くなるもので大半を占める。

B類：筒部から玉縁部にかけて幅・器高とも一定のもの（第13図4）。

丸瓦で完全な形のものは、褐色を呈し、焼きが悪く軟質である。堅く焼けている瓦は、歪んでいるのが多く、中には、はっきりと焼台に使用されたことがわかる（第14図8）。軟質の丸瓦は、S I 5住居跡の周溝の施設瓦として使用されており、（第13図1～9）、焼成不良のものを利用したものと考えられる。

(3) 軒 平 瓦

重弧文・単弧文の破片が8点出土している。瓦当文様の明らかなものは、3点のみである。瓦当面は、1本及び2本の弧線がヘラ描きされ、ヘラケズリ調整されている。額面は、縦方向の縄叩き目が施され、額部の粘土接合面には、斜格子状のヘラキズが認められる。G-63（第16図9）は、瓦当面に重弧文、額面に2本の沈線と鉛歯文が見られる。

(4) 軒 丸 瓦

軒丸瓦は、瓦当文様が重弁蓮華文、細弁蓮華文、重闇文で、小破片も含めて8点出土している。重弁蓮華文 F-32・39（第16図8・4）は、花弁のみの破片で、中房、周縁は不明である。F-42（第16図5）は、周縁と一部花弁の破片で、推定直径は23.4cmである。

細弁蓮華文 F-30（第16図1）は、推定直径19.6cm、20葉の花弁、中房直径4.5cmに、1+5の蓮子を配している。外区内側に推定24ヶの珠文を約2.5cmの周隔で配している。F-35（第16図2）は、推定直径18.0cm、外区珠文と花弁の破片である。花弁は幅0.6cm、長さ3.2cmで、外区内側に約2.0cmの間隔で珠文が配されている。F-30と比較した場合、花弁の大きさ、

珠文の間隔等から小形のものと思われる。

重圓文 F - 23・25・40・41 (第16図3・7) は、いずれも周縁部片で、瓦当面は磨滅の為、判明しないが、中房は、二重の圈線で表わしたものと思われ、内区文様も二重の細い圈線で表わしている。周縁は、直立しており、推定直径は、F - 23が14.4cm以上、F - 40が17.2cm、F - 25が19.0cmである。

(5) 鬼 板

S K25土壤、ピットNo.4 から合計5点の中房、頂部、底辺部片を出土している。鬼板は、重弁蓮華文を中心とし、その開口を蓮珠文、さらに外側に唐草文を配している。重弁は、8葉と思われ、厚さは、隆起しない部分で4.1cm、高い部分で5.4cmを計り、復元重弁面径30cm、蓮珠文径33.6cmである。また頂部は、角張らず、弧をもち、底辺部は、ほぼ中央に径約19.0cmの半円形の割り込みがあり、幅45.2cmと思われる。中房は欠損している為不明であるが、近接する桥江遺跡出土鬼板の中房は1+4の蓮子を配していることから、同様の文様形態と思われる。釘穴は、不明である。鬼板裏面は、荆竹状の繩で編んだ縱方向の賣の子の圧痕が認められる。

鬼板を出土する陸奥国分寺のものは、幅・高さとも44cm程であり厚さ2~3cmである。本遺跡出土のものは、高さ推定45.2cm程であり、文様や全体の形態は前者と同様と思われるが、唐草文の位置などから同範ではないと思われる。H - 1とH - 2・3とでは、厚さが異なり別個体のものと思われる。

(6) 刻印文字瓦

文字瓦は、総数23点出土している。平瓦は、凹面、丸瓦は、凸面に刻印されている。刻印の種類は、「丸」、「物」、「田」、「矢」、「占」、「伊」で判読不明なものも含めて、6種類である。丸瓦に刻印されているのは、「占」、「田」、「伊」の3種類6点である。いずれも凸面筒部の玉縁近くに刻印されており、刻印の一辺が1.9~2.5cmと不規則である。平瓦に刻印されているのは、「丸」、「田」、「矢」、「物」、「占」の5種類17点である。いずれも凹面端部近くに刻印され、刻印の一辺が1.8~2.5cmと不規則である。刻印文字の各出土数は、「丸」6点、「田」5点、「物」4点、「矢」3点、「伊」2点、「占」2点、不明が1点出土している。

4. 鉄 製 品

カスガイが1点出土したのみである。形状は「コ」字状でや、開くものである。長さ7.6cm、幅10cmである。鉄滓は、ほとんど小塊で3点出土している。

5. 土 製 品

羽口P - 1 (第20図8) は、先端部破片で、残存部から推定して、直径5.5cmの円筒形を呈し、先端は、焼けたれ、溶鉄滓が付着している。内外面ナデ調整が施されている。

土鉢P-3（第20図5）は、不整球形を呈する。その球形の中位に推定直径0.6cm程の孔が対に穿たれており、その孔を結ぶように切り込みが入っている。上部に把手がつき、その部分に糸を通したものと思われる。直径0.5cm前後の孔が穿たれている。

6. 石製品

砥石K-1（第20図9）は、石材粒子が均質な砂岩質のもので、自然面を残さず、小片になるまで両・側面を研磨している。

7. 陶磁器

大半が小破片で10点出土している。図化したのは、2点のみである。J-1（第20図3）は、高台が付く小形の壺で、口縁部まで丸味をもって直立する。口径5.5cm程、色調は、内外面とも灰白色である。J-2（第20図4）は、壺形で、体部下半から口縁部にかけて直立する。口径10.4cm程、色調は、外面にぶい赤褐色、内面暗褐色を呈している。

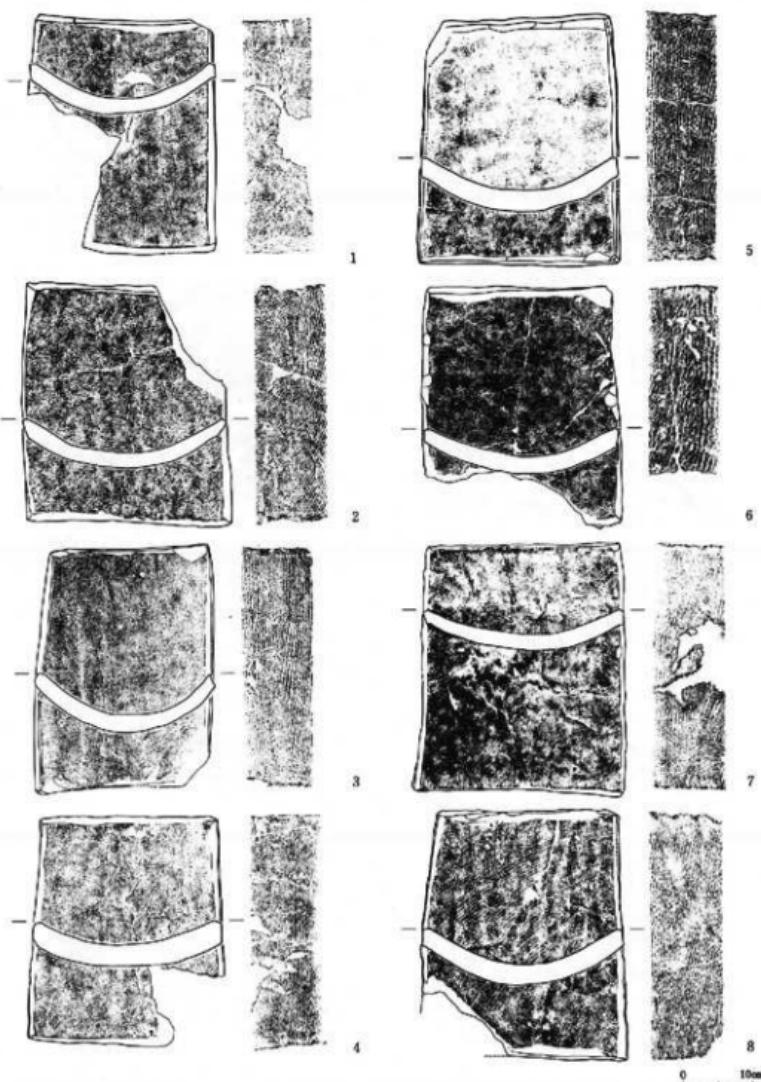
8. その他

三巴文瓦G-59は、瓦当面直径9.2cmに三巴を配したものである。

燈明皿D-8・9（第20図1・2）は、いずれも表土層出土のもので、口径4.8～5.5cm、器高1.3～1.6cmと小形の壺を呈している。内面に意芯受けを貼り付けたもので、囲りに黒斑が認められる。底部は、回転糸切りで、色調は、明赤褐色である。

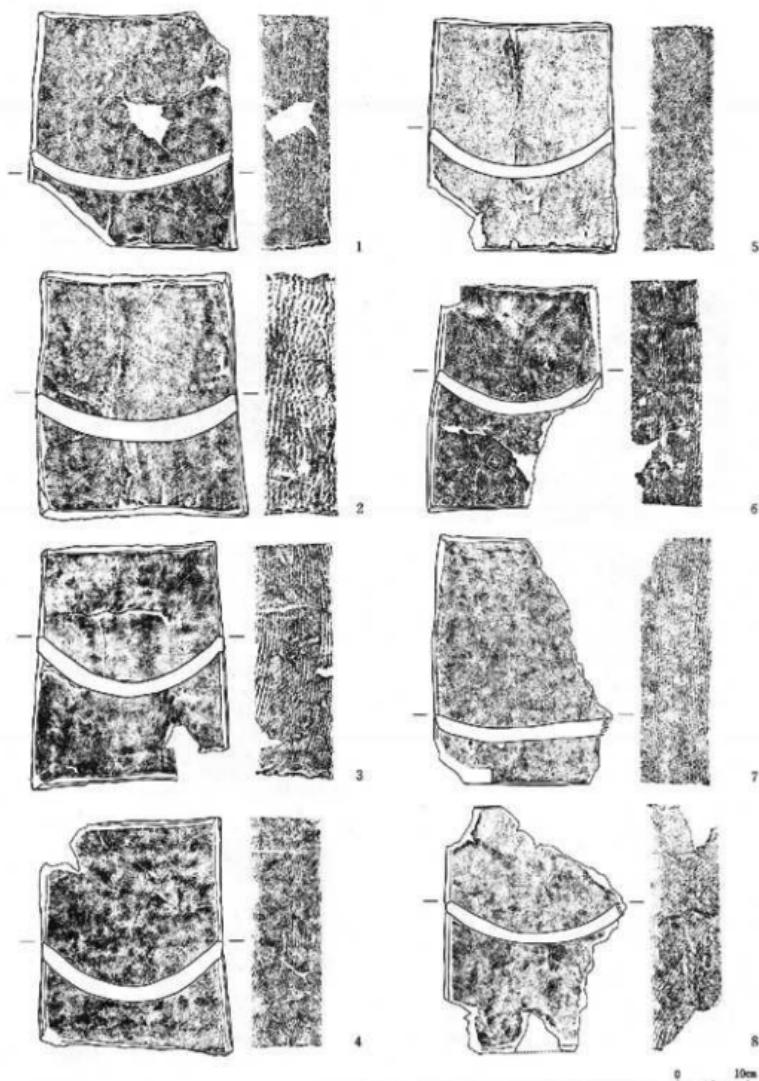
その他

P-4（第20図6）は、器形、性格共に不明のもので、斜めに孔を穿がたれている。



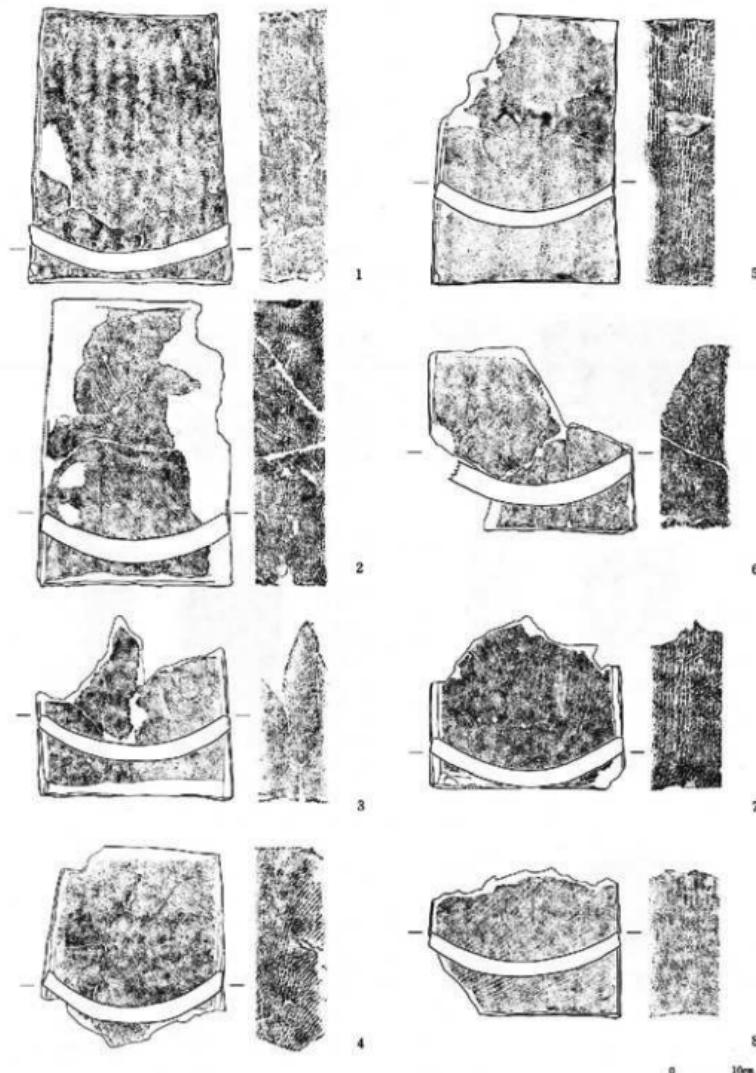
番号	空缺番号	写真回数	造	構	種類	凸	面	凹	面	番号	空缺番号	写真回数	造	構	種類	凸	面	凹	面
1	G - 1	28 - 1	S K 6	平瓦	縱縫目スリケン 縦脊痕	5	G - 8	29 - 2	S K 6	平瓦	縱縫目スリケン	5	G - 8	29 - 2	S K 6	平瓦	縱縫目スリケン	5	G - 8
2	G - 2	28 - 2	*	*	鉤、縱縫目 赤切り痕	6	G - 9	29 - 3	*	*	縱縫目スリケン	6	G - 9	29 - 3	*	*	縱縫目スリケン	6	G - 9
3	G - 4	28 - 3	*	*	縱縫目	7	G - 10	29 - 4	*	*	縱縫目	7	G - 10	29 - 4	*	*	縱縫目	7	G - 10
4	G - 5	28 - 4	*	*	縱縫目スリケン 赤切り痕	8	G - 11	30 - 1	*	*	縦縫目 一部スリケン 赤切り痕	8	G - 11	30 - 1	*	*	縦縫目 一部スリケン 赤切り痕	8	G - 11

第9図 平 瓦



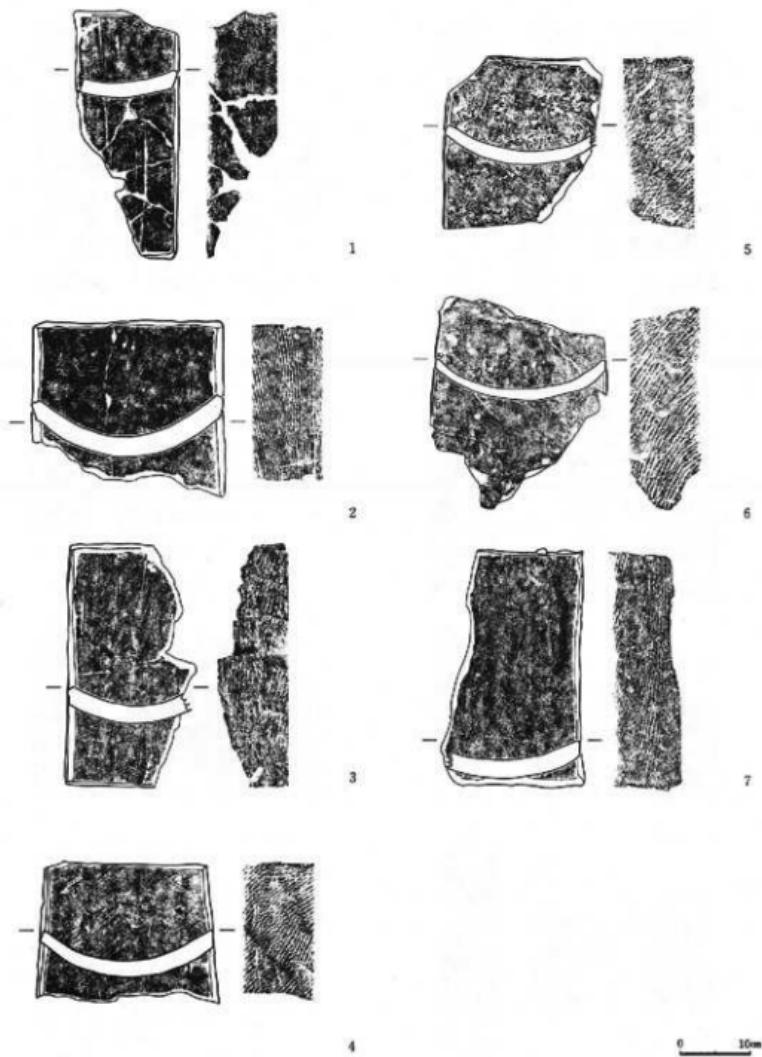
番号	登録番号	写真回数	造	綱	種類	凸	面	凹	面	番号	登録番号	写真回数	造	綱	種類	凸	面	凹	面
1	G-12	30-2	SK6	平瓦	縫	縫	日			5	G-17	31-3	SK6	平瓦	斜綱	縫	縫	日	
2	G-13	30-3	+	+	縫	縫	日			6	G-47	33-3	SD3	+	縫	縫	日		
3	G-14	30-4	+	+	縫	縫	日			7	G-16	31-2	SK6	+	縫	縫	日		
4	G-15	31-1	+	+	縫	縫	日			8	G-33	32-3	+	縫	縫	日			
																			0 10cm

第10図 平 瓦

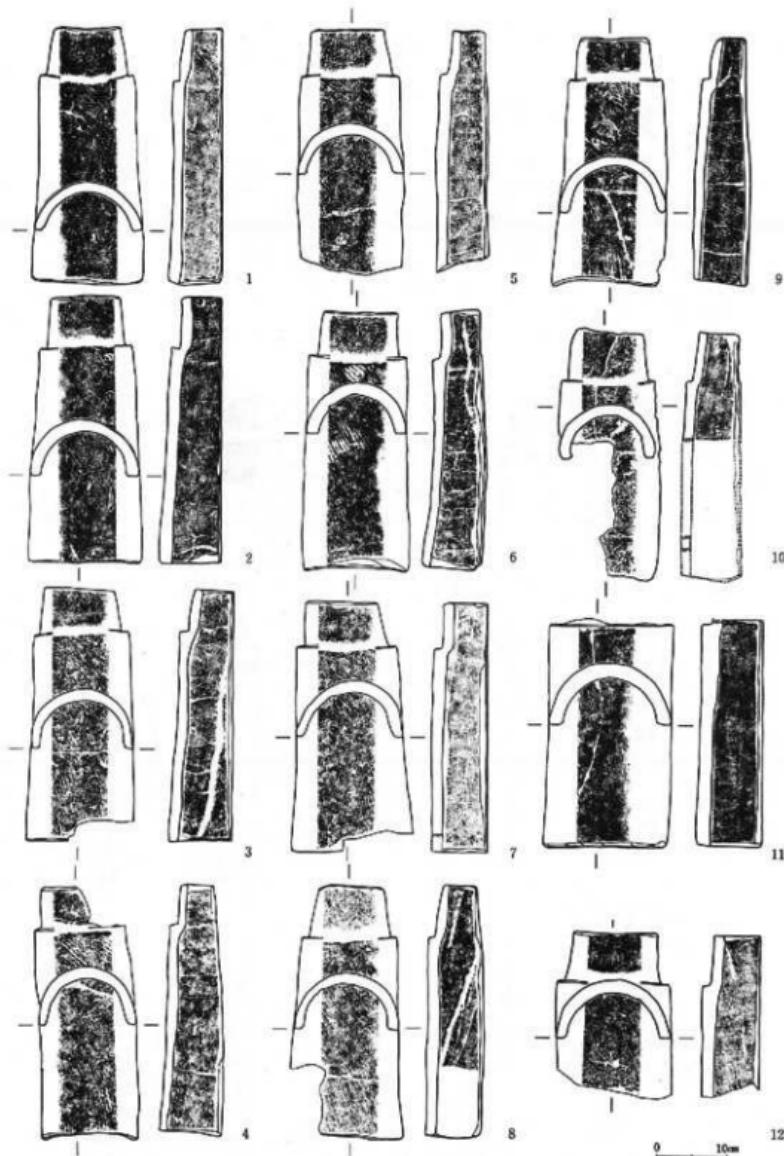


番号	登録番号	写真回数	造	精	地質	凸	面	凹	面	番号	登録番号	写真回数	造	精	地質	凸	面	凹	面
1	G-44	32-4	SK14	平瓦	粗	規	日	密目スリケン		5	G-57	33-4	SK5	平瓦	粗	規	日	布目一部スリケン	
2	G-45	33-2	*	*	粗	規	日	赤切り継 縫合痕		6	G-24		SK6	*	細繩目スリケン		密目スリケン		
3	G-20	31-4	SK6	*	粗	規	日	布目一部スリケン		7	G-31	32-2	*	*	粗	規	日	密目スリケン 赤切り縫	
4	G-42	33-1	SI2	*	外	規	日	全面スリケン		8	G-41		SI1	*	粗	規	日	布目、赤切り縫	

第11図 平 瓦

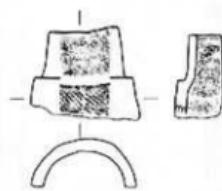
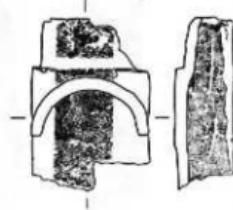


第12図 平 瓦



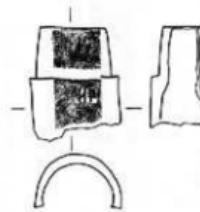
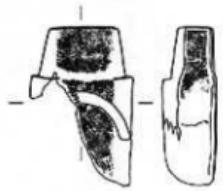
番号	性別	写真回数	道	種類	凸	凹	面	番号	性別	写真回数	道	種類	凸	凹	面
					白	黒	面						白	黒	面
1	F - 10	34 - 3	S 15	AJK	スリケシ	布	日	5	F - 15	35 - 2	S 15	AJK	スリケシ	布	日
2	F - 11	34 - 5	*	*	*	*	*	6	F - 16	35 - 3	*	*	*	*	*
3	F - 12	34 - 7	*	*	*	*	*	7	F - 17	35 - 4	*	*	*	*	*
4	F - 13	35 - 1	*	*	*	*	*	8	F - 18	35 - 5	*	*	*	*	*
5								9	F - 19	35 - 6	S 15	AJK	スリケシ	布	日
6								10	F - 20	35 - 7	*	*	*	*	*
7								11	F - 21	35 - 8	S K 2	*	*	*	*
8								12	F - 1	34 - 1	S K 6	*	*	*	*

第13図 九 瓦



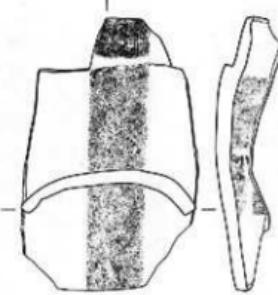
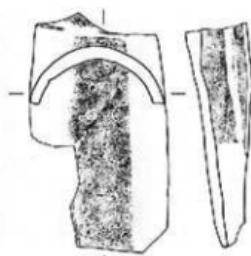
1

5



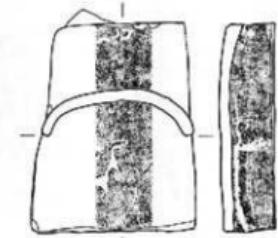
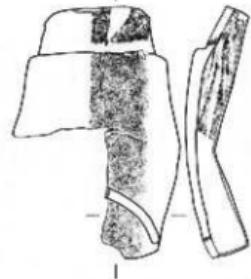
2

6



3

7

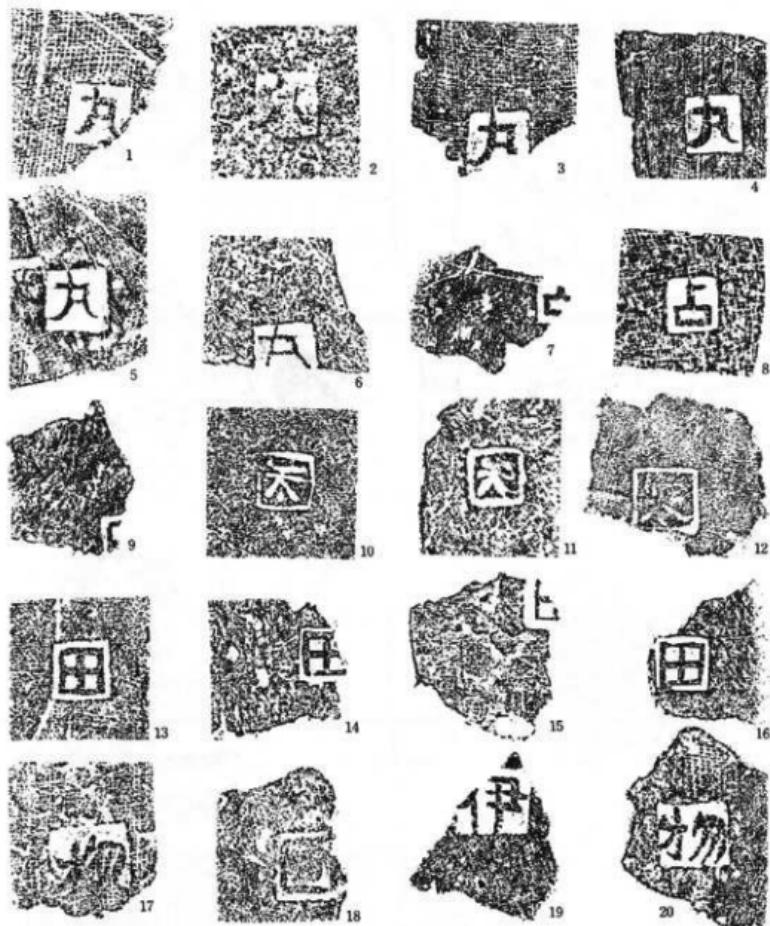


4

8

10cm

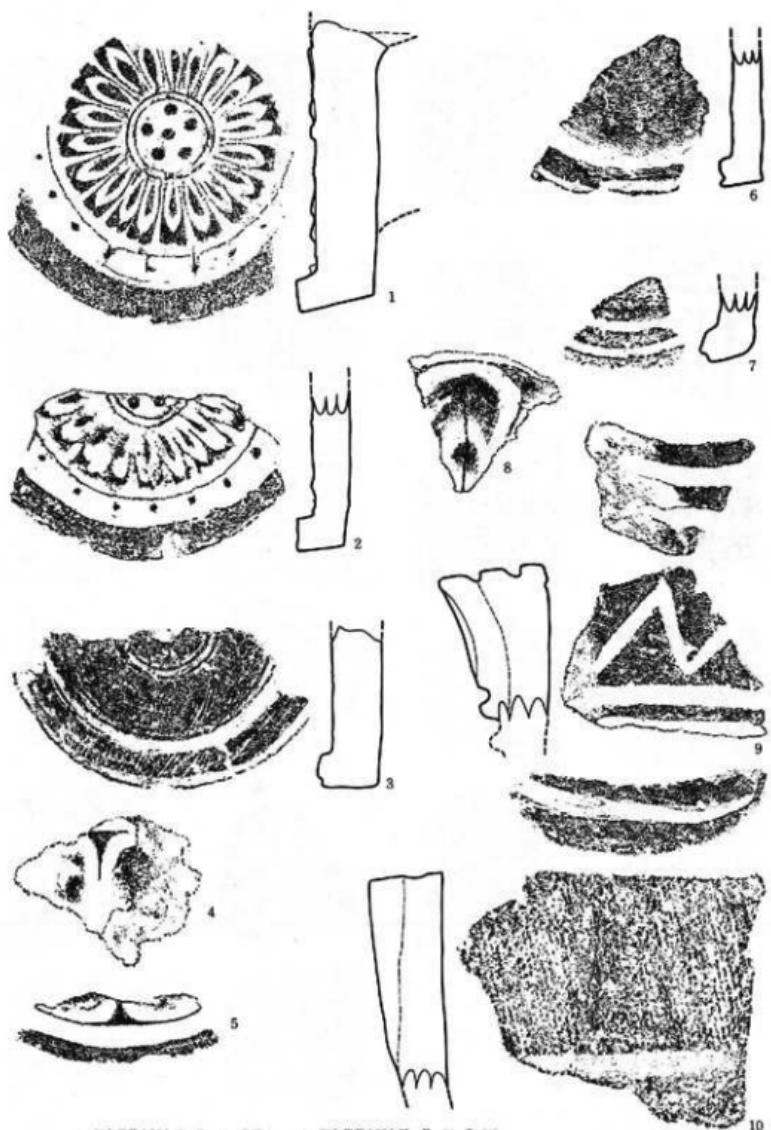
番号	登録番号	写真回数	透	横	横頭	凸	面	凸	凹	面				
1	F-2	S K 6	丸瓦	スリケシ				5	F-27	S K 25	丸瓦	スリケシ	丸目一部スリケシ	
2	F-21	S 15	*	*				6	F-26	36-20	S D 3	*	スリケシ「伊」	有目
3	F-8	S K 6	*	*				7	F-7	34-6	S K 6	*	スリケシ	*
4	F-3	34-2	*	*	*			8	F-5	34-4	*	*	スリケシ 泥池留底面	*



1. 半瓦 G-66 SD 3 2. 半瓦 G-49 SD 3
 3. * G-70 SK 6 4. * G-35 S 1 3
 5. * G-69 SD 3 6. * G-64 SD 3
 7. 九瓦 F-29 SK 13 8. * G-72 SK 1
 9. * F-38 S 1 2 10. * G-60 1区北側邊構面
 11. 半瓦 G-47 SD 3 12. * G-67 5トレ
 13. * G-65 SD 3 14. A瓦 F-33 S 1 2
 15. * G-56 SK 13 16. * F-34 SK 22
 17. * G-62 SD 3 18. 半瓦 G-38 S 1 5
 19. A瓦 F-37 表 拙 20. * G-66 S トレ
 21. 半瓦 G-71 SK 17 22. * G-51 SD 7

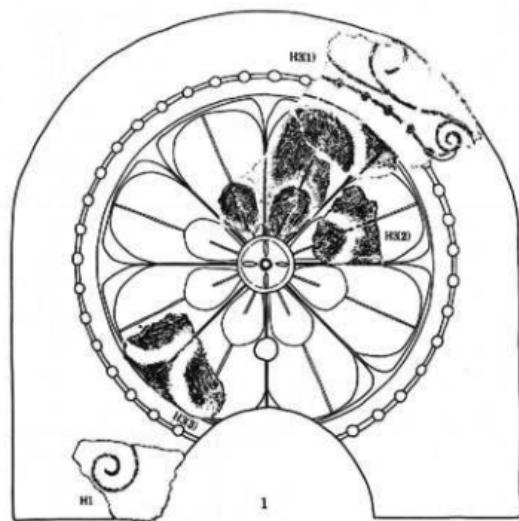
0 5 cm

第15図 刻印文字瓦拓影

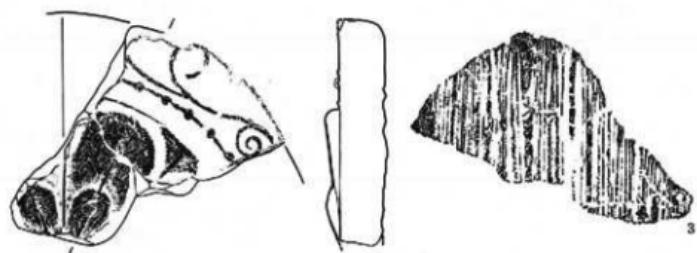


1. 輪廓文軒丸瓦 F - 30 SK 6
 2. 重輪文軒丸瓦 F - 40 SK 1
 3. 重圓文軒丸瓦 F - 42 PH111
 4. 重輪文軒丸瓦 F - 41 棚 丸
 5. 重輪文軒丸瓦 G - 63 SK 22
 6. 重圓文軒丸瓦 F - 35 PH143
 7. 重輪文軒丸瓦 F - 39 PH120
 8. 重輪文軒丸瓦 F - 25 SK 14
 9. 重輪文軒丸瓦 F - 32 6 ト レ 表土
 10. 単弧文軒平瓦 G - 61 II区透視斜出

0 10cm

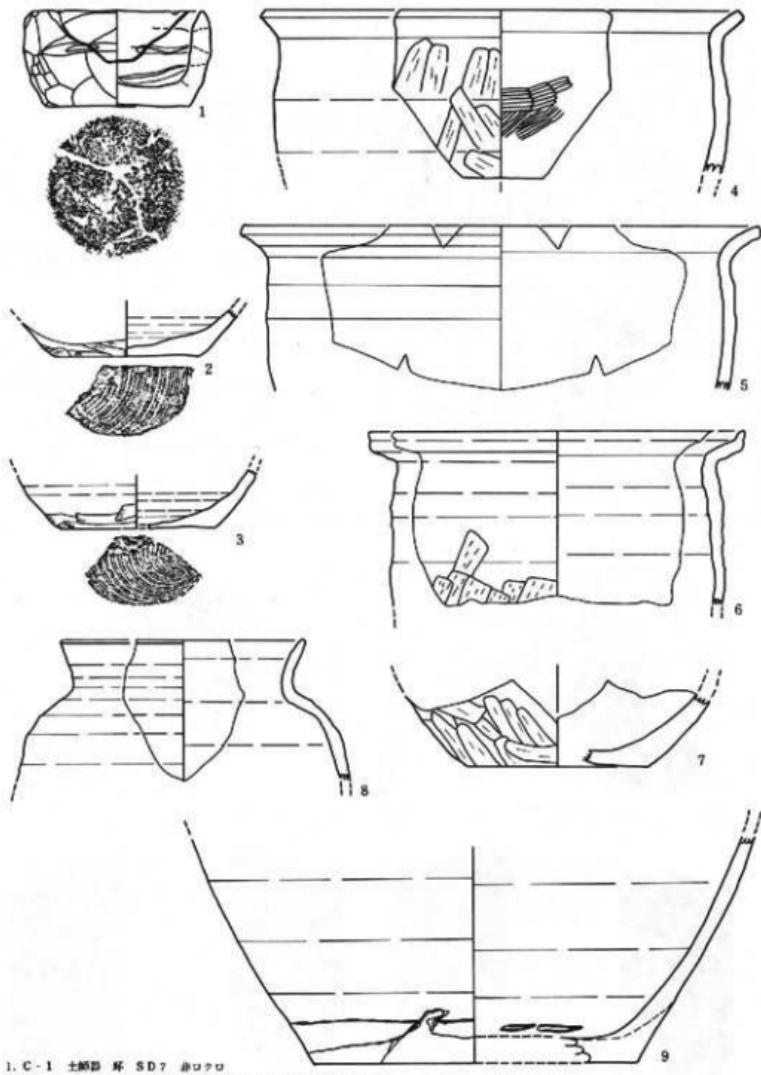


1. 光板復元図及び破片の位置
 2. H - 1 鬼板 Ⅱ区検査面
 3. H - 3(1) * Pt.4
 (破片3点合併)
 4. E - 10 須恵器 壺 SD 3
 内面、弧状オサ工具痕→ナガ割裂
 外面、交差する平行タタキ
 5. E - 6 須恵器 壺 SI 3
 内面、ロクロ調査
 外面、平行タタキ(底部はナガ調査)
 * H - 3(1)～H320, Pt.4 出土で同一個体



0 10cm

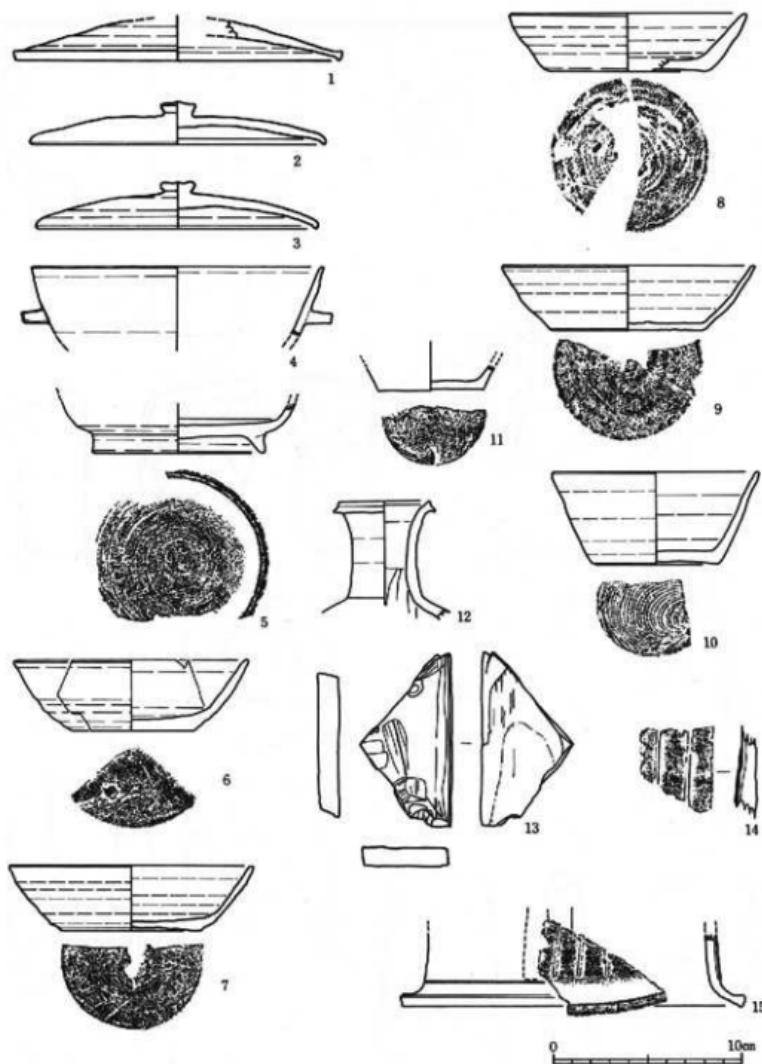
第17図 鬼板 須恵器



1. C - 1 土器形 瓶 SD 7 ロクロ
 2. D - 1 * * SK 6 ロクロ[側輪系切り、外腹底部へラケズリ]
 3. D - 2 * * SK 6 * (* - *)
 4. D - 4 * 突 SI 5 * (外腹へラケズリ、内腹一部ヘラミガキ)
 5. D - 3 * * SI 3 *
 6. D - 7 * * Pit 91 * (外腹下节へラケズリ)
 7. D - 4 * * SI 5 * (外腹下节へラケズリ)
 8. E - 4 漆器形 瓶 SI 3 *
 9. E - 9 * 突 SI 3 *

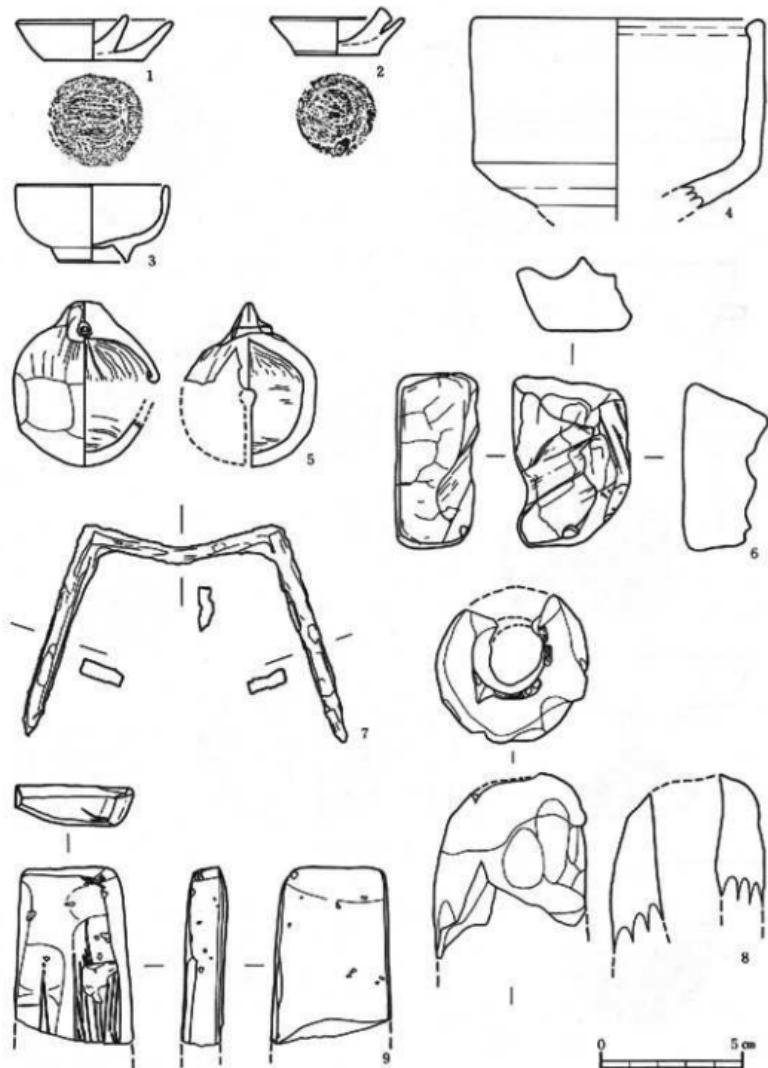
0 10cm

第18図 土 器



- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. E - 7 滅底器 茶 S I 5 | 8. E - 3 回転器 碗 S I 3 (回転ヘラケズリ→回転ヘラ切り) |
| 2. E - 15 * S K 17 | 9. E - 1 * + S K 6 (回転ヘラケズリ) |
| 3. E - 14 * * | 10. E - 29 * + P I 91 (回転ヘラ切り) |
| 4. E - 13 * 成 S K 7 (把手付) | 11. E - 2 * + S K 6 (回転ヘラ切り) |
| 5. E - 25 * 年 P I 20 (高台付・回転ヘラケズリ) | 12. E - 17 * + S K 5 (長柄盤) |
| 6. E - 11 * 年 S I 3 (回転ヘラケズリ) | 13. K - 2 * + S K 21 (底字碗) |
| 7. E - 5 * * + (回転ヘラケズリ) | 14. E - 21 * + S トレ (円筒碗) |
| | 15. E - 24 * + S I 3 (*) |

第19図 土 器



1. 磁器皿 D-8 青土
 2. 磁器皿 D-9 青土
 3. 陶器残 J-1 SK4
 4. 陶器残 J-2 SK4
 5. 土鉢 P-3 青土
 6. 土器品 P-4 SK6
 7. カスガイ N-1 Pit4s
 8. フイゴ洞口 P-1 SK6
 9. 石 K-1 西東トレ

第20図 その他

VI ま と め

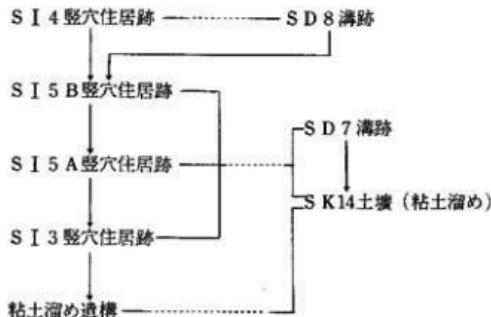
今回の調査は、台原・小田原古窯跡群中の窯跡の調査であったが、調査対象地区が、窯の立地していたとみられる南斜面の上部に位置する、テラス状の平場であったことから、窯跡本体を検出することができなかったが、窯に隣接して造られたとみられる竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡などの遺構が検出され、窯業生産地の実態を解明する上で、貴重な資料を得ることができた。

1. 発見遺構について

竪穴住居跡・竪穴遺構は、6軒検出されたが、出土した土器の年代からみて8世紀後半から9世紀代のものとみられ、瓦の年代とほぼ同一時期であることからみても、瓦生産の中で營まれた住居ないしは竪穴遺構とみられる。特にS I 5住居跡の様な周溝に丸瓦を施設する住居はそれを裏づけるものであろう。また、住居が廃棄された後、原料となる白色粘土などが入れられており、粘土溜めとして再利用された形跡もみられる。ここでは瓦生産に伴う工房施設とみておきたい。掘立柱建物跡は、11棟検出されたが、全容を知り得るものは、2棟のみであるが、桁行2~3間、梁行1~2間の小規模なものだけで、掘り方の規模や柱痕跡の太さも、さほど大きくなかった。これらの掘立柱建物跡も一般集落の住民とは考え難く、瓦の貯蔵・保管を行った倉庫もしくは、この地区的窯が官窯としての性格を担っていたことから、工人集団を管理する役人のための施設とも考えられる。また、土壤のうちいくつかは底面に厚く白色粘土が入っており、原料粘土を入れておく、粘土溜めとして使用されていたことが伺える。また、焼成の段階でゆがみやわれを生じたものを一括して投棄した瓦溜めの穴も発見された。

遺構の重複や配置関係から変遷がたどれるものは次のとおりである。

I区南半



II区



以上の様に、造構が密集している部分では5回程の変遷がみられ、かなり長期間にわたってこの地区が利用されていたことが伺える。また、工房と考えられるS I 3・4・5堅穴住居跡は斜面につくられていることから、斜面上方に排水用とみられるSD 7・8などの溝跡を伴っているとみられる。

窯場の中には窯本体の他に粘土溜め、工房、倉庫、不良品廃棄穴などの関連施設が存在し、これらがひとつのまとまりを持って窯場を構成していたことが理解されよう。

2. 出土遺物について

今回の調査では、土師器、須恵器、瓦、土製品、石製品、鉄製品、陶磁器等を出土しており特に瓦は、出土量の大半を占めている。その中でも平瓦が多量している。

主に出土量の多い瓦、そして須恵器等について検討する。

瓦は、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、鬼板、文字瓦等を出土している。平瓦は、大半が同様の調整技法で製作され、凹面が糸切り、布目、スリ消し、凸面が縱方向の縦叩き目のち一部スリ消しがみられ、形状もほぼ正方形に近く、凹面に横骨痕が残ることから桶巻作りのものと思われる。丸瓦は、全て玉縁付有段瓦で、粘土紐巻作りである。ほぼ完形のものが多いが、軟質硬質に分けられ、軟質のものは、S I 5住居跡の周溝の施設瓦として使用され、また硬質の瓦の中には、明らかに焼台として使用されたものが出土している。軒平瓦は、単弧文、重弧文が出土しており、破片の為、全容は知りえないが、重弧文は、瓦当面に二重の弧が施され、顎面に2本の沈線と鋸齒文が見られる。軒丸瓦は、重弁蓮華文、重圓文、細弁蓮華文が出土し、重弁蓮華文は、弁のみの破片で、重圓文は、周縁が軽くたち上がり、外・内に2本の周線を巡らすもので、中心の蓮子の有無については、不明である。細弁蓮華文は、中房に1+5の蓮子を有し、花弁、外区内側に珠文を配するものである。

鬼板は、中央に重弁蓮華文、周縁に蓮珠文及び唐草文を配するもので、破片の為、推定であるが、近接する横江跡、陸奥国分寺等からも同様の文様形態をもつものが出土している。刻印文字瓦は、6種類、23点出土しており、平瓦では、凹面端部に刻印されており、近接する蟹沢中瓦窯跡と同様、指書、蓖書きは、見られない。

須恵器环は、少量であるが、底部離し技法によって第A～E類と5類に分けられるが、主体を占めるものは、回転ヘラケズリ無調整のもの、及び切り離し技法が不明で回転ヘラケズリ調整のものである。

本遺跡出土の須恵器环と周辺の遺跡と比較した場合、多賀城Ⅲ期の瓦を焼成した安養寺下窯跡では、回転糸切り無調整のものであり、安養寺中畠窯跡でも糸切り無調整である。桥江遺跡出土の环は、底部切り離し技法によって第1～8類され、本遺跡出土のものは、第1・2・8類に類似している。全てロクロの回転力をを利用して、静止糸切り、手持ちヘラ削り調整のものは見られない。本遺跡は、遺構からの出土遺物が少なく、資料に欠しいが、瓦の多くは、多賀城跡出土の瓦と比した場合、Ⅱ・Ⅲ期に与えられる。特に伊治城・蟹沢中遺跡などからセットとして出土している重圓文と単弧文は、多賀城Ⅲ期に位置づけられ、さらに刻印文字瓦は、多賀城跡、陸奥国分寺跡、同尼寺と同様に多賀城Ⅲ期と考えられる。

本遺跡は、窯跡内からの出土遺物でないため、遺構・遺物について明らかにすることは難しうが、周辺の窯跡群、蟹沢中窯跡、神明社窯跡、橋江遺跡、与兵衛沼窯跡とほぼ同時期と見られ、8世紀中葉の鬼板等の瓦も含まれているが、ほとんどが8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

3. 遺跡の性格

神明社窯跡は、与兵衛沼窯跡、橋江遺跡（窯跡・土房跡）、蟹沢中窯跡と続く一連の窯跡群の中に位置づけられているが、窯跡と工房跡が一体となって発見された橋江遺跡では重弁蓮華文軒丸瓦と単弧文軒平瓦のセット関係から、多賀城Ⅲ期（奈良時代後半）の段階を年代の上限として考えられているおり、多賀城Ⅲ期（平安時代初期）まで工房は活動を続けていたとみられている。本窯跡の調査では必ずしも軒丸瓦と軒平瓦のセット関係が明確でないが、軒丸瓦は重弁蓮華文より重圓文ないしは細弁蓮華文を中心としており、単弧文軒平瓦とのセット関係や刻印文字瓦の在り方から、西に隣接する蟹沢中窯跡との共通性、一体性がみられる。発見された遺構の在り方から、今回の調査地区は、瓦屋ないしは造瓦所としての性格を持っていた地区と考えられ、神明社窯跡だけでなく、蟹沢中窯跡までを包括した地区を一つのまとまりとした瓦工人集団の存在を想定することができよう。

参考文献

- 渡辺泰伸・結城慎一 「蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書」 1972.3 古窯跡研究会
- 渡辺泰伸・結城慎一他 「陸奥国官窯跡群」 1973.3 古窯跡研究会
- 「陸奥国官窯跡群Ⅱ」 1976.5 古窯跡研究会
- 仙台市文化財調査報告書第18集「折江遺跡発掘調査報告書」 1980.3
- 伊東信雄編「陸奥国分寺跡」 1961 陸奥国分寺跡発掘調査委員会
- 「研究紀要Ⅰ～Ⅳ」 宮城県多賀城跡調査研究所 1974～77

写 真 図 版

図版1
遺跡全 景



図版2
調査区全 景

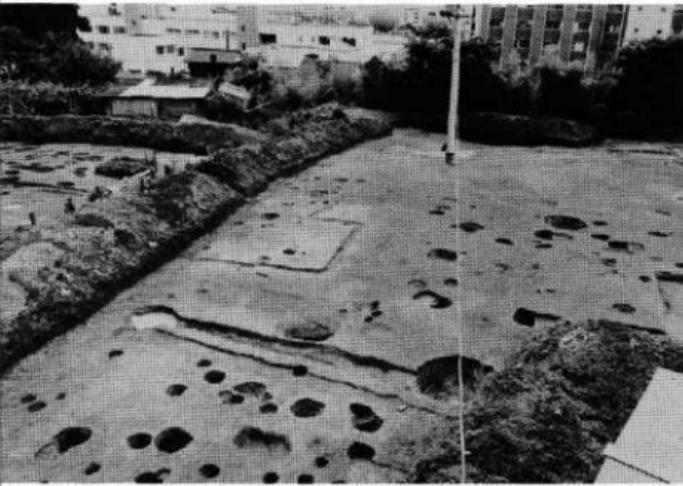


図版3
調査全 景





図版4
I区 西半部全景

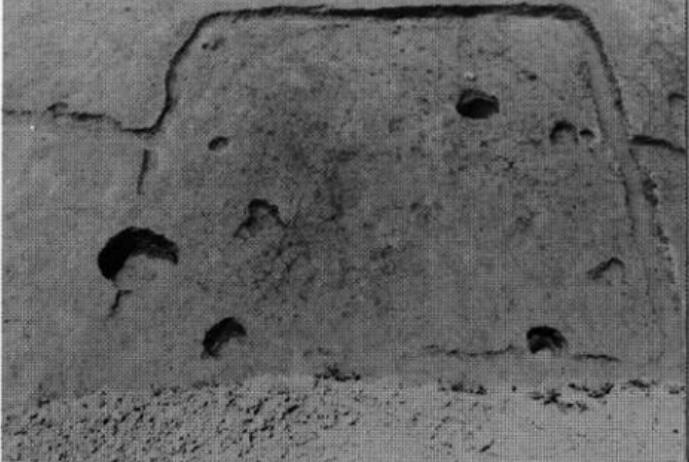


図版5
I区 東半部全景

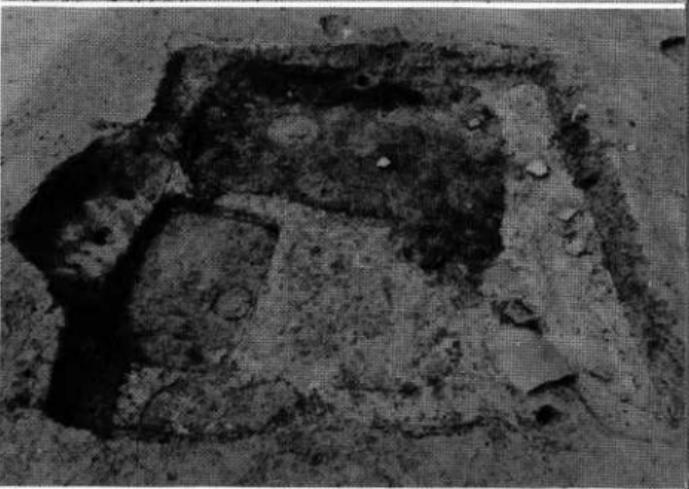


図版6
II区 全景

圖版 7
S I 1 住居跡全景



圖版 8
S I 2 住居跡
遺物出土狀況

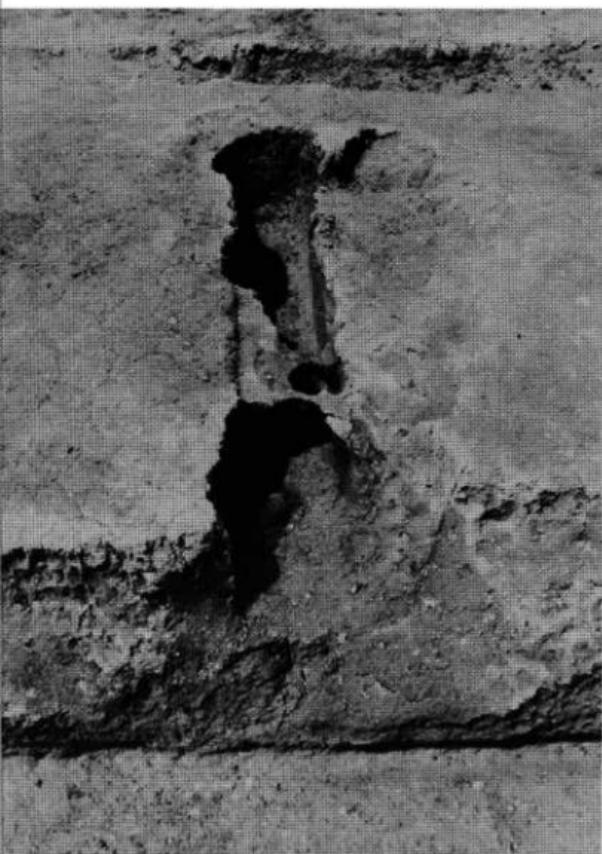


圖版 9
S I 2 住居跡全景





図版10
S I 3
住居跡



図版11
S I 4 住居跡 カマド煙道

図版12
SI 4 住居跡
遺物出土状況



図版13
SI 5 住居跡 全 景



図版14
SI 5 住居跡
カマド検出状況



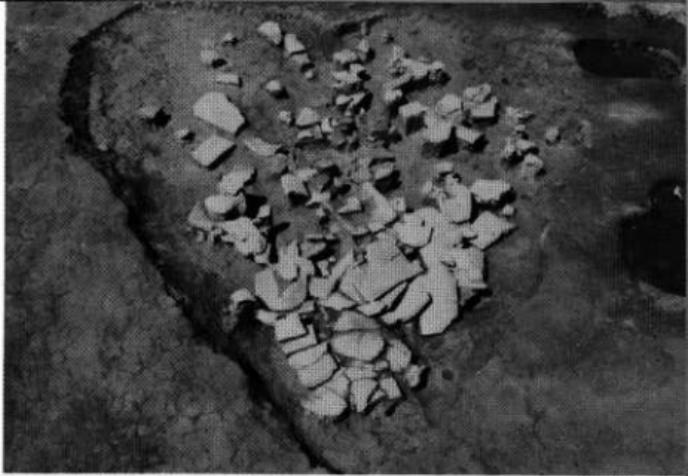


図版15
SD12 溝跡



図版16
SI 5住居跡
カマド下層

図版17
SK6土壤
遺物出土状況

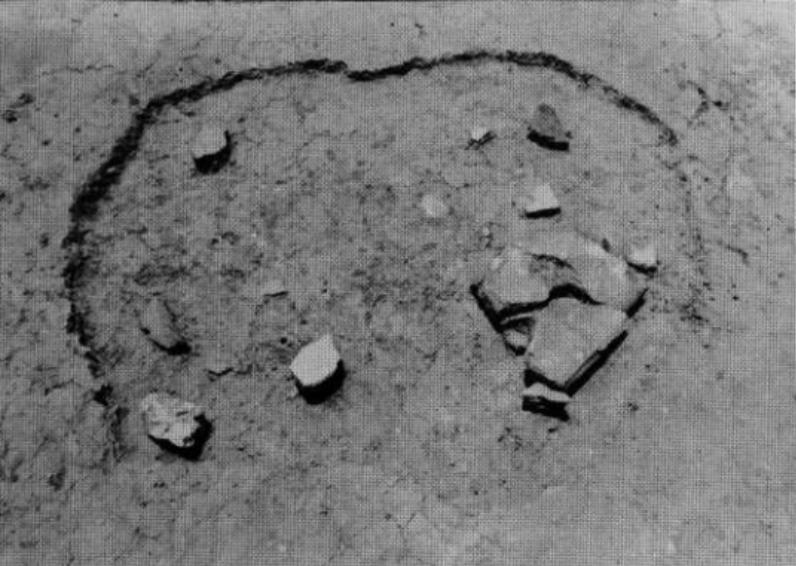


図版18
SK7土壤
遺物出土状況



図版19
SK14土壤
東西セクション





图版20
SK15土壤
遗物出土状况

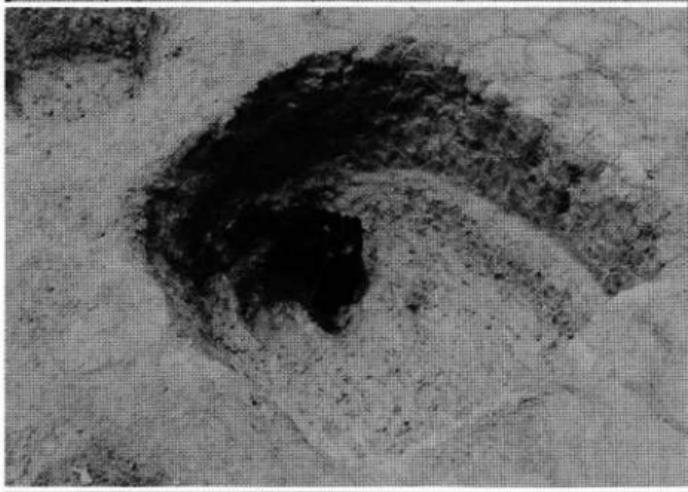


图版21
SD3 溝跡 遗物出土状况

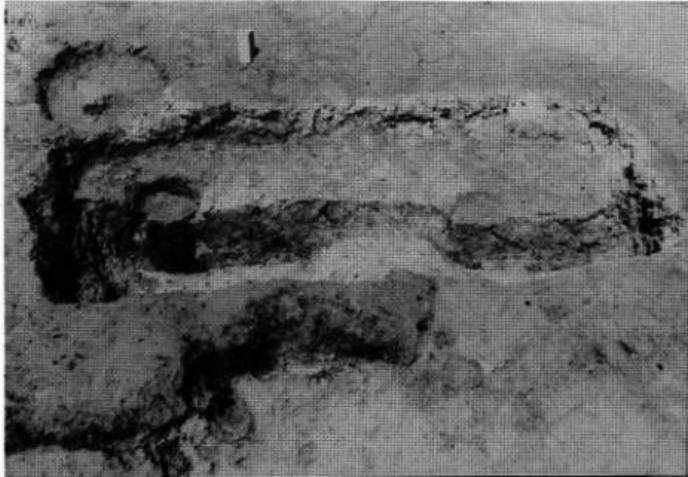
図版22
ピットNo.59
柱穴セクション



図版23
ピットNo.59
柱根検出状況



図版24
ピットNo. 127・128
柱穴セクション

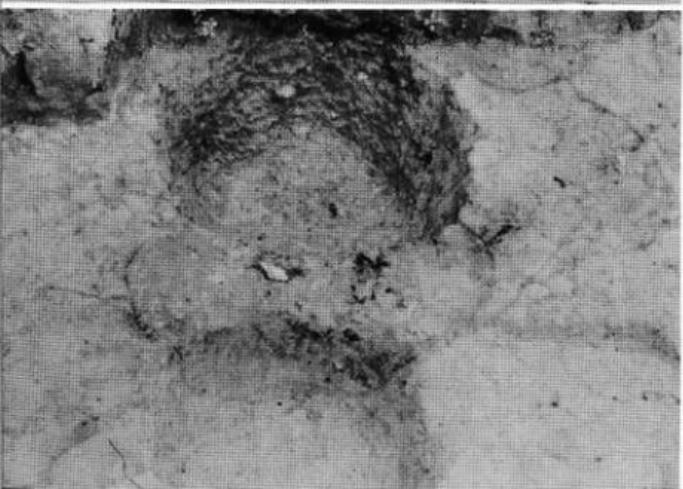




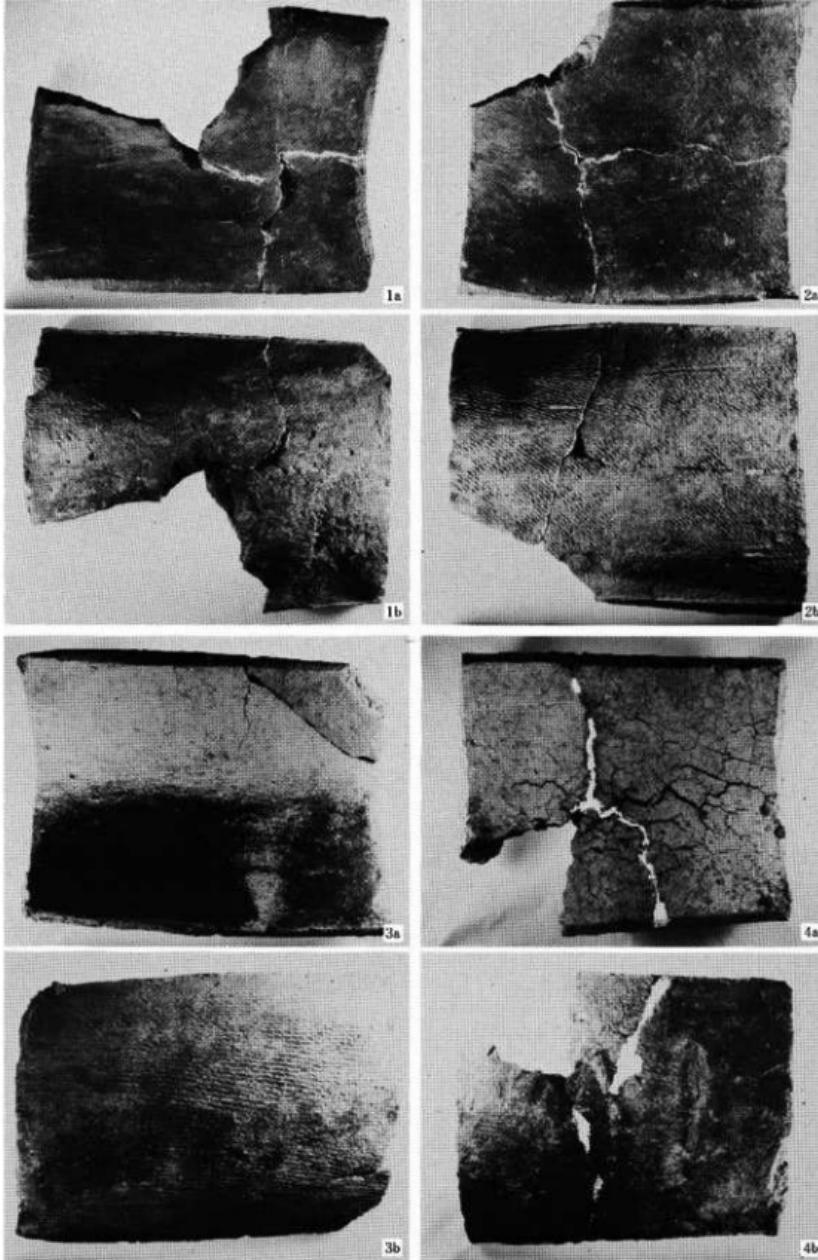
図版25
SK 30 焼土遺構



図版26
SK 30 焼土遺構

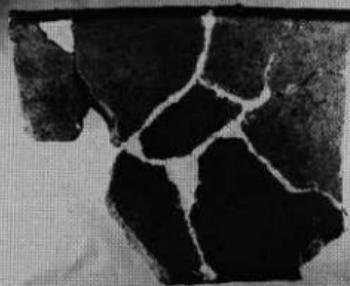


図版27
SK 31 焼土遺構



1. G - 1 平 瓦
3. G - 4 平 瓦
2. G - 2 平 瓦
4. G - 5 平 瓦

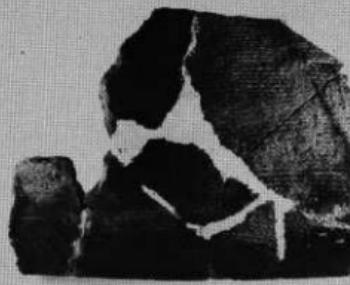
图版28 出土遗物



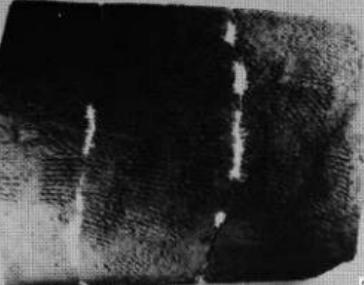
1a



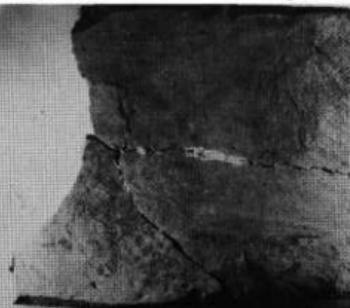
2a



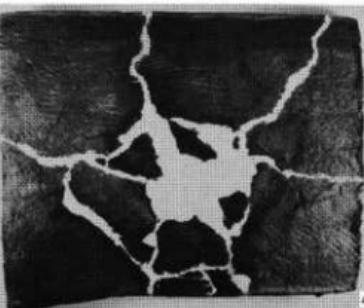
1b



2b



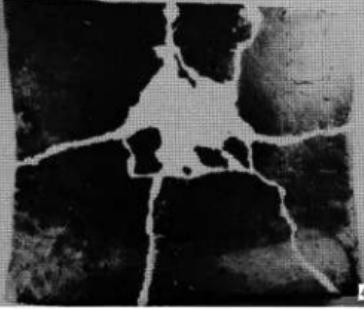
3a



4a



3b

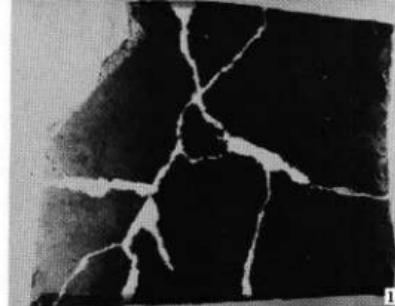


4b

1. G - 7 平 瓦
3. G - 9 平 瓦

2. G - 8 平 瓦
4. G - 10 平 瓦

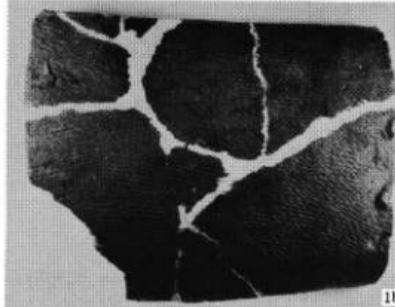
图版29 出土遗物



1a



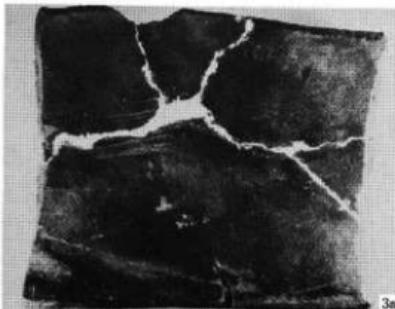
2a



1b



2b



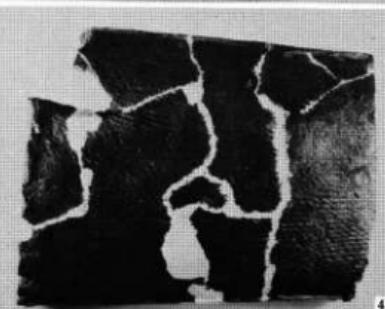
3a



4a



3b

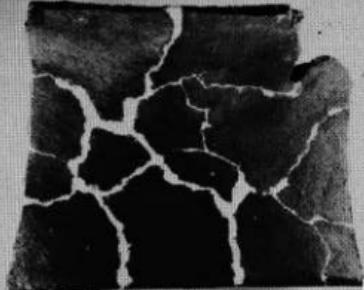


4b

1. G -11 平 瓦
3. G -13 平 瓦

2. G -12 平 瓦
4. G -14 平 瓦

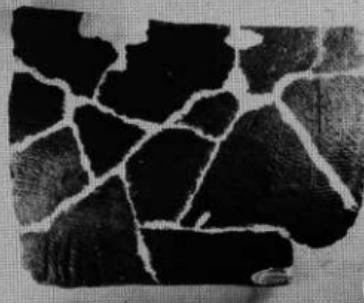
图版30 出土遗物



1a



2a



1b



2b



3a



4a



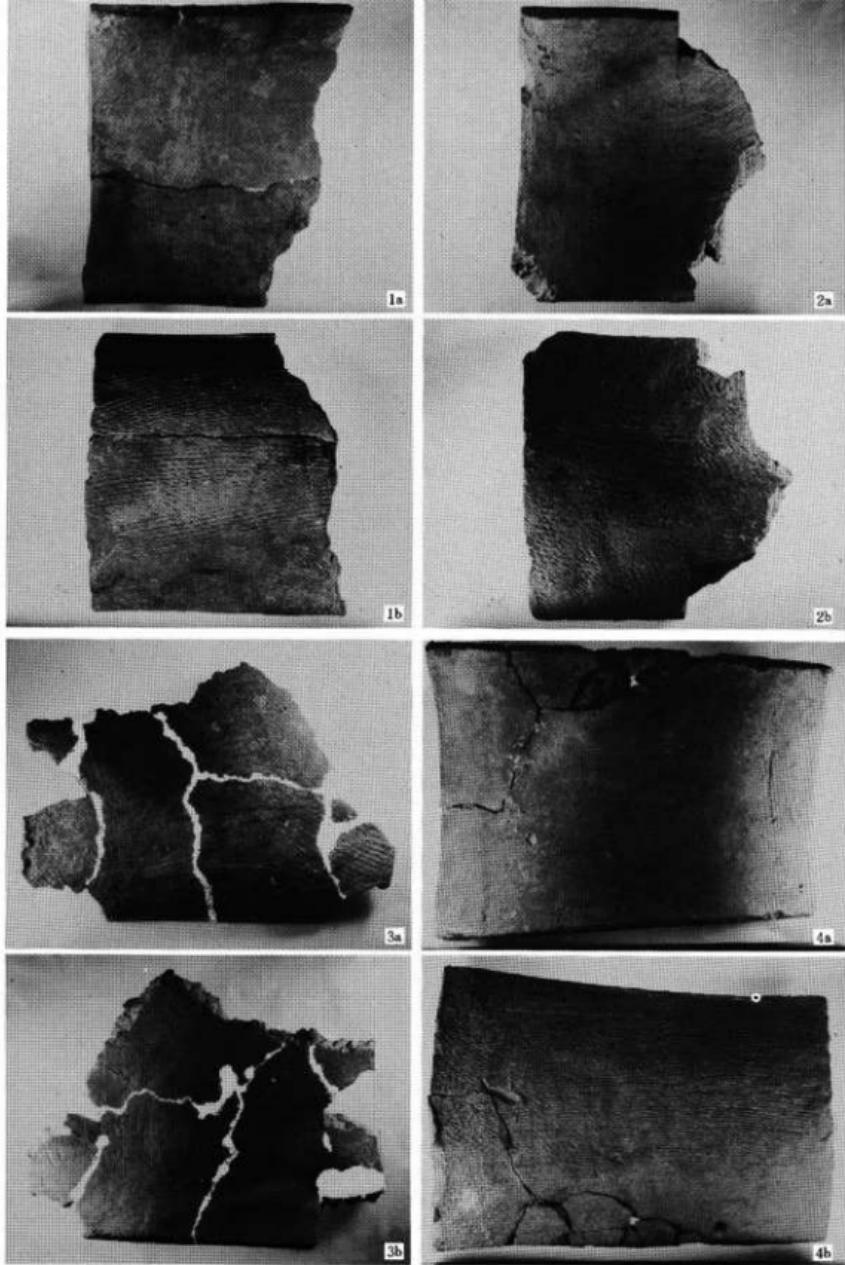
3b



4b

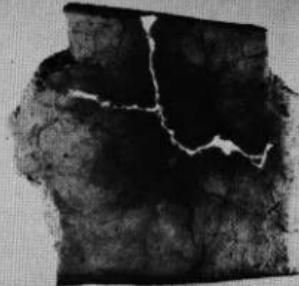
1. G - 15 平 瓦
2. G - 16 平 瓦
3. G - 17 平 瓦
4. G - 20 平 瓦

図版31 出土遺物



1. G-25 平瓦 2. G-31 平瓦
3. G-33 平瓦 4. G-44 平瓦

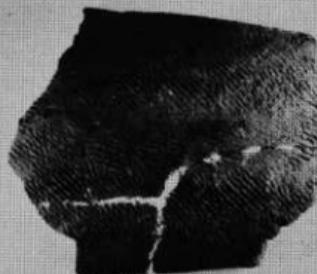
图版32 出土遗物



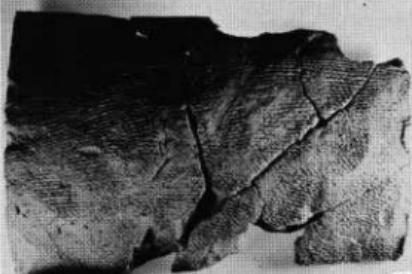
1a



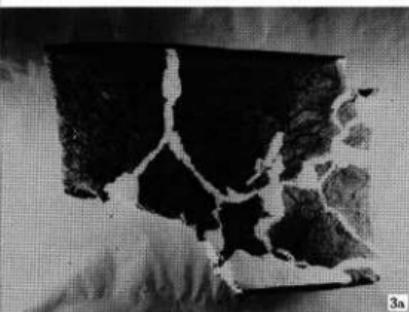
2a



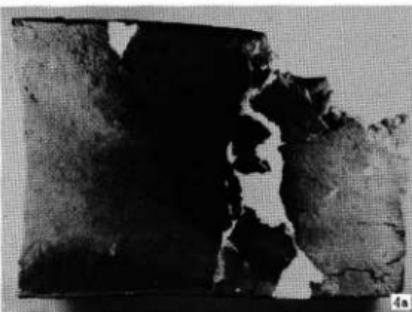
1b



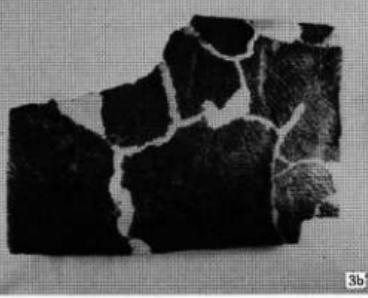
2b



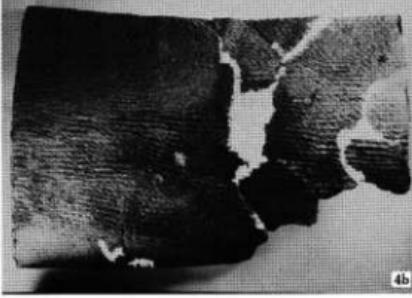
3a



3a



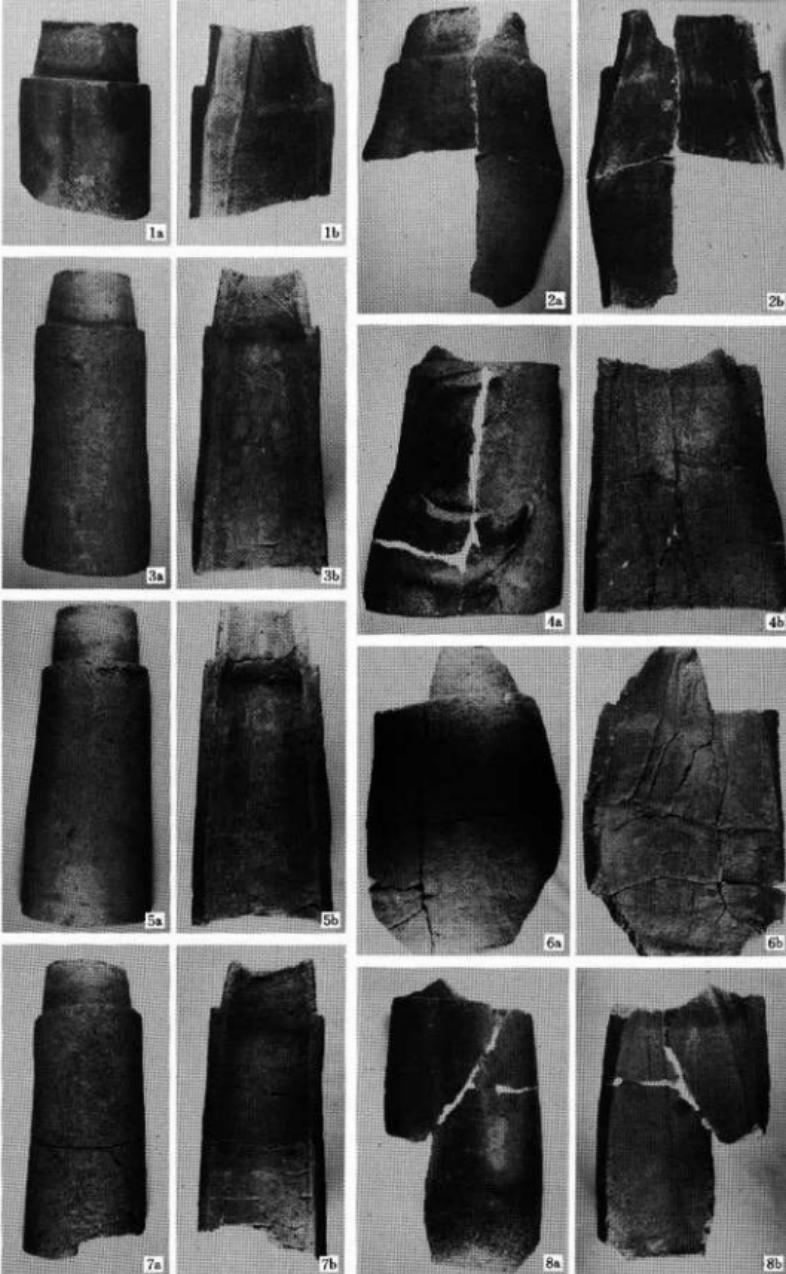
3b



4b

1. G - 42 平 瓦
2. G - 45 平 瓦
3. G - 47 平 瓦
4. G - 57 平 瓦

图版33 出土遗物



- | | |
|--------------|-------------|
| 1. F - 1 丸瓦 | 2. F - 3 丸瓦 |
| 3. F - 10 丸瓦 | 4. F - 5 丸瓦 |
| 5. F - 11 丸瓦 | 6. F - 7 丸瓦 |
| 7. F - 12 丸瓦 | 8. F - 8 丸瓦 |

図版34 出土遺物



1a



1b



2a



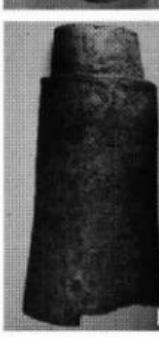
2b



3a



3b



4a



4b



5a



5b



6a



6b



7a



7b

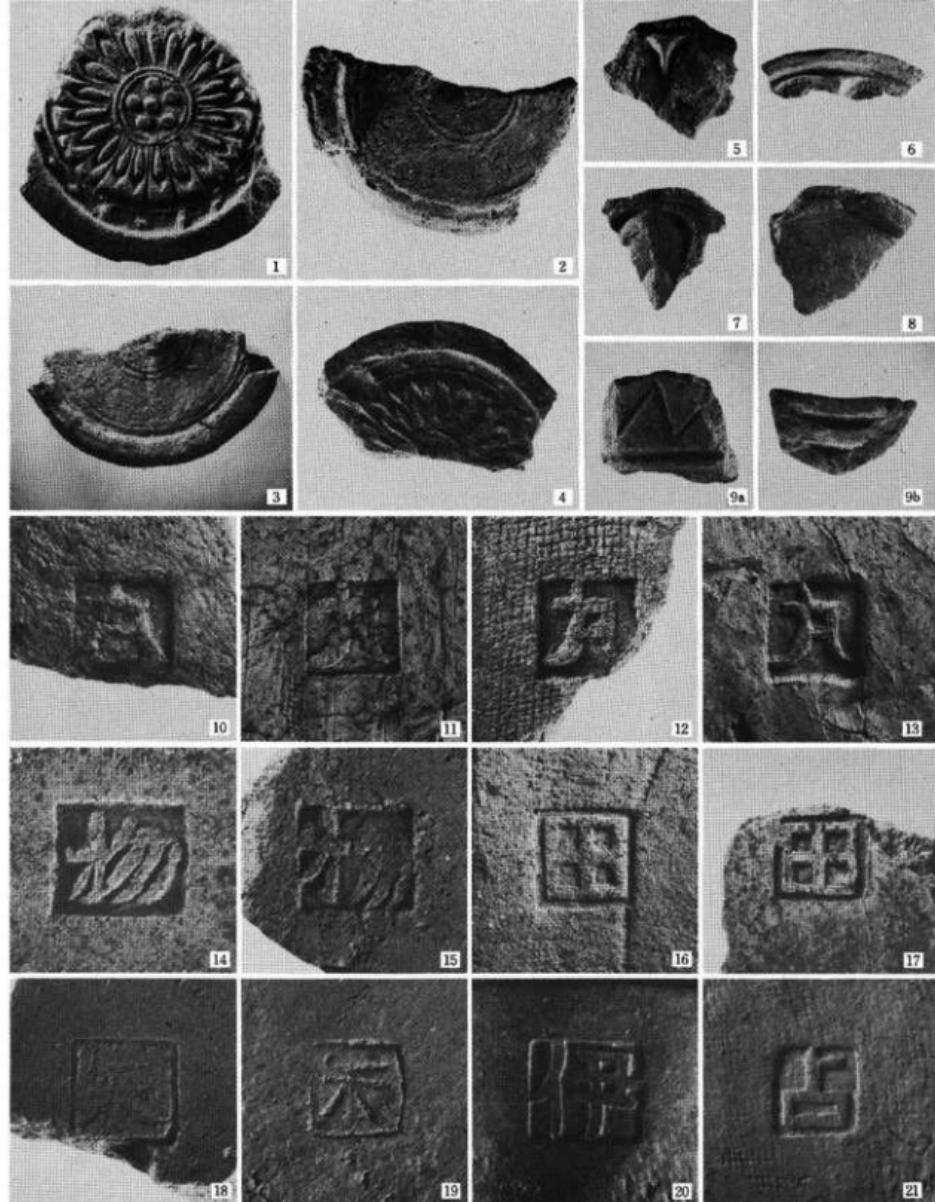


8a



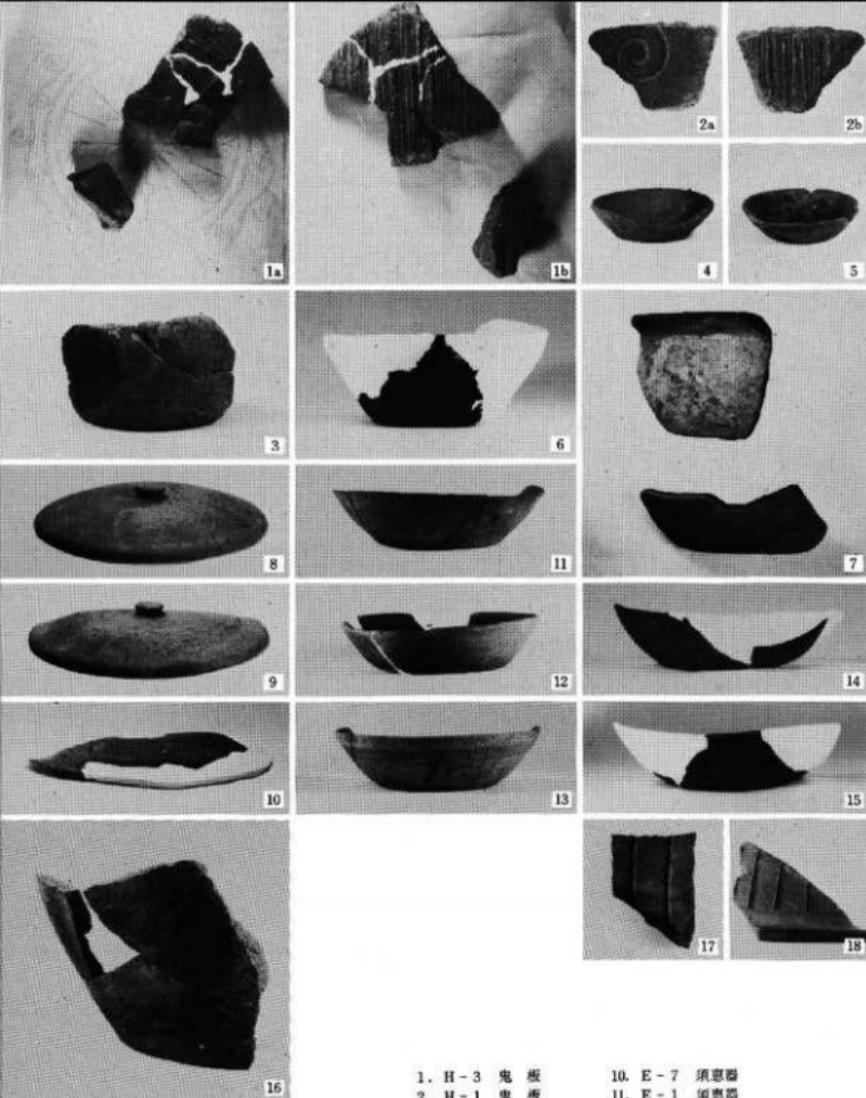
8b

1. F - 13 丸 瓦
2. F - 15 丸 瓦
3. F - 16 丸 瓦
4. F - 17 丸 瓦
5. F - 18 丸 瓦
6. F - 19 丸 瓦
7. F - 20 丸 瓦
8. F - 26 丸 瓦



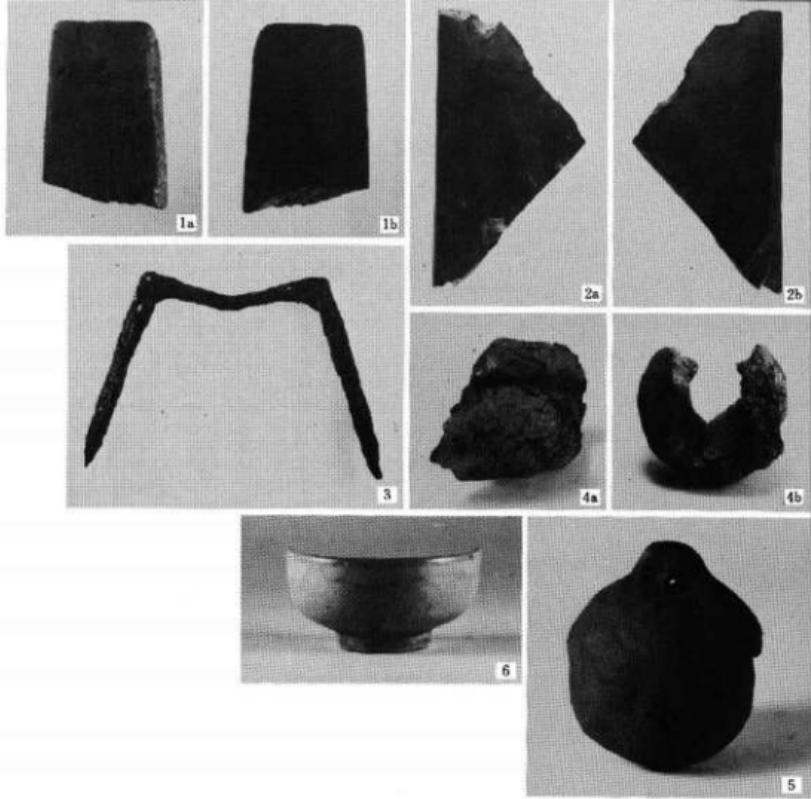
- | | | | |
|---------------|----------------|----------------|----------------|
| 1. F - 30 轩丸瓦 | 6. F - 42 轩丸瓦 | 11. G - 35 平 瓦 | 16. G - 65 平 瓦 |
| 2. F - 33 轩丸瓦 | 7. F - 32 轩丸瓦 | 12. G - 68 平 瓦 | 17. G - 34 平 瓦 |
| 3. F - 40 轩丸瓦 | 8. F - 25 轩丸瓦 | 13. G - 69 平 瓦 | 18. G - 67 平 瓦 |
| 4. F - 23 轩丸瓦 | 9. G - 63 轩平瓦 | 14. G - 51 平 瓦 | 19. G - 60 平 瓦 |
| 5. F - 39 轩丸瓦 | 10. G - 64 平 瓦 | 15. G - 66 平 瓦 | 20. F - 36 丸 瓦 |
| | | | 21. G - 72 平 瓦 |

图版36 出土遗物



- | | |
|---------------|----------------|
| 1. H - 3 鬼 板 | 10. E - 7 須惠器 |
| 2. H - 1 鬼 板 | 11. E - 1 須惠器 |
| 3. C - 1 土師器 | 12. E - 3 須惠器 |
| 4. D - 9 土師器 | 13. E - 5 須惠器 |
| 5. D - 8 上師器 | 14. E - 11 須惠器 |
| 6. D - 6 上師器 | 15. E - 19 須惠器 |
| 7. D - 4 土師器 | 16. E - 9 須惠器 |
| 8. E - 14 須惠器 | 17. E - 21 須惠器 |
| 9. E - 15 須惠器 | 18. E - 24 須惠器 |

圖版37 出土遺物



1. K - 1 石製品
2. K - 2 石製品
3. N - 1 金屬製品
4. P - 1 土製品
5. P - 3 土製品
6. J - 1 陶器

圖版38 出土遺物

職員録

社会教育課	仙台市文化財調査報告書刊行目録
課長 永野昌一	天然記念物栗屋下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
課主幹 早坂春一	仙台城（昭和42年3月）
文化財管理係	仙台市宮代寺跡等古跡群調査報告書（昭和43年3月）
係長 大沢隆夫	史跡隆奥園分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和41年3月）
係主事 山口宏	仙台市南小泉法師蒙古古跡調査報告書（昭和47年8月）
・ 渡辺洋一	仙台市荒巻五本松裏跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
文化財調査係	仙台市宮代寺町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
係長（兼） 早坂春一	仙台市向山横穴群調査報告書（昭和49年5月）
教諭 佐藤一隆	仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
・ 渡辺忠彦	仙台市山田安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
・ 佐藤裕裕	史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
主事 田中城則和	史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査報告書（昭和52年3月）
・ 細川慎一	南小泉遺跡一昭和開拓認定調査報告書一（昭和53年3月）
・ 成瀬清一	栗原跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
教諭 佐藤正裕	史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
・ 加藤正裕	六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
主事 田中城則和	北屋敷遺跡（昭和54年3月）
・ 細川慎一	江戸跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
教諭 論事	仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
・ 柳木浩一	史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
・ 成瀬清一	仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和53年3月）
・ 柳木浩一	経ヶ峯（昭和55年3月）
・ 佐藤正裕	年报1（昭和55年3月）
・ 佐藤正裕	今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
・ 佐藤正裕	二神率遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
・ 佐藤正裕	史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	年报2（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	郡山遺跡一昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	仙台市開発関係遺跡調査報告II（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	鶴ヶ島遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
・ 佐藤正裕	六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
・ 佐藤正裕	南小泉遺跡一都市計画道路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
派遣職員	北前道遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
嘱託	仙台平野の遺跡群一昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）
	郡山遺跡一昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）
	史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和57年3月）
	仙台市高連鉄道関係遺跡調査概報1（昭和57年3月）
	年報3（昭和57年3月）
	郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）
	栗原跡発掘調査報告書（昭和57年8月）
	鶴ヶ島遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
	茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一（昭和58年3月）
	郡山遺跡一昭和57年度発掘調査概報一（昭和58年3月）
	仙台平野の遺跡群II一昭和57年度発掘調査報告書一（昭和58年3月）
	史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
	仙台市文化財分布調査報告書I（昭和58年3月）
	岩切・畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
	仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
	南小泉遺跡一都市計画道路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
	中山・畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
	神明社立跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
	南小泉遺跡一青葉女子学園移転新校工事地内調査報告（昭和58年3月）

仙台市文化財調査報告書第54集

神明社 痕跡

昭和57年度発掘調査報告

昭和58年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市日の出町2-4-2

TEL 96-7181
